厄神様の厄

霜月　昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
厄神様の厄

【Ｎコード】
Ｎ５６１５Ｓ

【作者名】
霜月　昂

【あらすじ】
この作品は東方ｐｒｏｊｅｃｔ二次創作です。
作者の勝手な解釈や妄想が混じっています。
登場人物によるスペルカードの解釈などは、東方シューティングの攻略の役には立ちません。
キャラ崩壊などありますので苦手な方はご遠慮ください。

登場キャラ…

鍵山雛
河城にとり
霧雨魔理沙
博麗霊夢

…以下増えていきますがネタバレのため残りは作中で。

1－1　『厄神様の通り道』

彼女はいつも通り山の「厄神様の通り道」にいた。
黒と赤を基調にしたゴシック風の服を着た少女。通り道で一人空を見上げている。
彼女の名は鍵山雛。
周囲の厄を集めることで人々の生活を守る。流し雛・八百万の神の一柱だ。
それを辛いと思ったことはない。
ただ誰かと話すとき自分の周囲に集めた厄が、話し相手に影響を及ぼさないかと気を遣うくらいだ。
それゆえに雛と話をするものは限られていた。
しかしそんな雛に気を遣わなくても話せる話し相手がいる。
「雛おはよう！」
「おはよう、にとり」
河童・河城にとりだ。
緑のリュックを背負い服のいたるところに工具をぶら下げた少女だ。
この幻想郷で唯一の発明家であるにとりは最近厄神である雛に近づいても「厄が取り憑かない機械」を発明し、雛と頻繁に話すようになった。
ただしこの機械は大量生産出来る段階ではなく、今はまだにとり専用しかない。
けれども雛は心から会話に専念できる相手がにとり一人でも不満ではなかった。
八百万の神としての使命。雛は自分の幸福感はそこにあるとおもっているからだ。
そんなことを考えていると、やや興奮気味ににとりが話しかけてくる。

「雛、人里の人間の話って聞いた？」
「人里の人間の話？」
雛は首を傾げる。山を降りたところに人間の住む「人里」があり、神々の住む「山」とは別世界のようなものだ。
神の領分・人の領分。
ここ幻想郷にはそい言う観念が存在する。
首を傾げる雛を見て「やっぱり知らないか」と呟き、にとりは話を始める。
にとりと話しながら雛は思う。
「あなたとこうしてと話せるだけで私は幸せです。ありがとう、にとり」
心の中で河童の少女に礼を言って、雛はにとりの話に耳を傾けた。

1―2　『幻想入り』

最近、外の世界の人間がこの幻想郷に迷い込んでくることが多い。
「幻想入り」と名づけられたこの現象の原因は不明で、さる妖怪の仕業だったり、自然発生的なものだったりで一致しない。
しかし幻想郷の住人は（一部を除いて）その理由を追及しているわけではない。
幻想郷はすべてを受け入れる。
それがこの土地の気質と言うやつだ。
来る者は拒まず去る者は追わず、日々を暮らしていく。
しかし雛の目前にいる河童の少女は違う。
謎があれば追求し、新しいものを次々と作り出していく。
ただ厄を集めるだけの自分とは異なり、新しい何かを生み出している。そんなにとりを見て雛は「にとりの方が神様らしい」とふと思った。
「いろんなものを発明するにとりは、妖怪だけど神様みたいね」
そう言うとにとりは「そんな大層なものじゃないよ」といって苦笑していた。
雛は別に自分が何かを作り出す神様になりたいわけでも、にとりの事が羨ましいと思っているわけではない。
単に神様の在り方についての一見解を示しただけだ。
つまるところ雛は自分の役目について真面目に考えている。
ただそれだけのことだ。
※
人里に新しく幻想入りした人間が来たという。
「と言うことで人里へ行こう！」
それをにとりは一緒に見に行こうと雛に言って来た。
にとりの行動力には感心するが雛は内心で首を傾げる。
付き合いの長い彼女なら自分がどう答えるか知っているはずだ。

「私は人里に行かないわ」
その理由は分かっているでしょう？雛はそう視線で問いかける。
そんな雛に対してにとりは人差し指を立てて、チッチッチッっと舌打ちをする。
「分かってるよ。自分が人里に降りて厄が周囲に広がることを心配しているんでしょう？」
「その通りよ」
「けれど今、人里大きな厄があるとしたら？」
雛の表情が険しくなる。
それは己が厄を集めて人里に災厄を招かないようにしている自分に対する、挑発に他ならないからだ。
「私が集めてない厄が人里にあるとおっしゃるのですね」
険しさの増す雛に説明するにとり。
にとりの話を聞いて雛は元の表情に戻る。
「行きましょう人里へ」
そう言った雛の瞳は使命の炎で燃えていた。

1―3　『厄神』

流し雛。三月三日のひな祭りは、古くは厄を乗せた人形を川へと流す「流し雛」の風習として存在していた。それがやがて人形を着飾るようになり、祭るようになった。

現代では一部を除いて幻となった厄払いの儀式。

鍵山雛はそんないくつもの流し雛軍団の長だ。人形が集めた厄を己の身の回りに集め、人々の厄を一身に受け持つ。

流し雛の人形たちは雛にとって、妹であり娘であり大切な仲間でもある。

そんな流し雛たちが雛の命令を受けず動くことはないはず…だった。

「これはどういうこと！？」

人里に下りた雛は驚嘆する。いつもは厄神の通り道に隠れている人形たちが人里に下りてきているのだ。

自分の意思で行動する。人形にはそう言った「自我」がない。

誰かに与えてもらうか、長年かけて意志を身につけるくらいだ。

流し雛たちはそのどちらでもない。

「どうしてこの子達が勝手に？」

「落ち着いてよ雛。人形たちの視線の先を見てごらん」

にとりに言われ冷静さを取り戻した雛は人形たちの視線をたどった。

そこには一人の人間が立っていた。

年は十代後半から二十代前半くらいだろう。

黒い髪に整った顔立ち、一言で言えば特に目立つところのない青年。

しかし雛には分かっていた。

その青年から己に匹敵するほどの「厄」を感じることを。

「あの人が原因っぽいけど」

にとりの言うとおりだ。
雛がにとりから聞いた事は「厄神である雛以外に厄を集めている輩がいる」と言うことだった。
厄神でも無い者が厄を集めれば、その者自身に災厄が訪れ自滅する運命だ。
しかしその者は厄を集めても自滅せず、その厄をなにやら物騒な目的に使っているとの事だった。
それを聞いた雛は真実を自分の目で確かめるために人里に下りたのだ。

「そこのあなた！」

雛は青年に話しかける。
周囲には村の人間がおびえた瞳で青年を見ていた。
しかし雛を見てその瞳に更なるおびえが表れる。
「や、厄神様！」
村人の誰かが雛の異名を言う。
それを聞いて青年は雛のほうに振り向く。
「！」
雛は青年と目を合わせる。
青年の目は驚くほど異彩を放っていた。
黒い感情が渦巻く、心に闇を宿したものの瞳。
目立つところのない青年の容姿が余計にその瞳を際立てていた。
「あなた！そのような物を集めてどうするつもりですか！」
雛は青年に問いかける。
「あんたのソレも、もらうぞ」
「きゃっ！」
突然青年は雛に襲い掛かる。
雛は何も出来ぬまま青年に服を掴まれる。
雛が無抵抗なのは当然だ。

雛の外見は人間の価値観で言って「可愛らしい、美しい」と言える。
しかし厄を集める厄神である雛に、触れようとするものなどいない。そんなことをすれば雛の周囲の厄によって、病におかされたり、不幸な目に遭ったりするからだ。
だから雛は自分に触れてきた青年の手を払いのける思考を持っていないのだ。
「や、止めな、さい」
雛の服で雛の首を絞める青年。雛は苦しそうに抵抗する。
「機改(きかい)水符・河童のポロロッカ！」
そこへにとりが割り込み水鉄砲を放ち雛から青年を突き放す。
広範囲に影響を及ぼすスペルカード。
それを「対人用」として効果範囲・威力共に弱体化させた、幻想郷でにとりだけが使える「機械とスペルカードの融合」。
それが機改符(きかいふ)だ。
機改水符・河童のポロロッカは子供のおもちゃのような鉄砲から水を噴き出す機改符だ。妖怪や人外の輩にはまったく効果がないが、大の大人を吹き飛ばす威力はあるので人間相手には十分だ。
「ぐっ！」
「女の子に乱暴するなんて男の子として最低だよ」
そう言って雛と青年の間に立つにとり。
「邪魔をするやつは容赦しない！」
青年はにとりをにらみつける。
すると青年の意思に従うかのように、青年の周囲に漂っていた人形がにとりを襲う。
ただの人形ではない。厄を乗せたその人形は雛の「厄をため込む程度の能力」の小型版とも言えるものだ。
妖怪であるにとりでも、触れれば厄が取り付く。
「危ないにとり！」
雛はにとりの前に立ち人形の厄を吸い取る。

厄を失った人形は魂が抜けたように地面に落ちる。
「雛！」
「私は大丈夫です！にとりは下がっていて下さい。あの人形の厄は大変大きなものです。触れればたちどころに病が発祥し、下手をすれば命に係わります！」
「わ、わかった」
にとりは走って雛から距離を置く。
そしてリュックからなにやら機械をとりだした。

１―４　『復讐者』

雛は目前の青年を見ていた。
黒い感情を込めたその瞳を見ながら問いかける。
「もう一度聞きます。厄を集めて何をするつもりですか？あなたは厄を周囲に振りまいているのですよ？」
「それが目的だ」
「何ですって？」
「みんな苦しめばいいのさ」
「あなた何を言って、」
「幸せそうなやつ、笑っているやつ、ムカつく。これは復讐だ！そのためにお前の厄も渡せ！！」
青年は再び雛に掴みかかろうとする。
雛は懐から一枚の札を出す。
スペルカードだ。
「疵符・ブロークンアミュレット！！」
雛の周りの厄が円陣を組む。
お守りのような形の円陣は厄を解き放つように壊れながら、青年を攻撃する。
「くっ！！」
通常ならば雛の厄を食らって卒倒するだろう。しかし青年は雛の厄に耐えている。
「そんなこれほどの厄を人間に耐えられるわけが！！」
よく見ると青年は厄に耐えているだけではなく、雛の放つ厄を吸収しているようだ。
「はああ！！」
「しまった！」
青年は溜め込んだ厄を雛に向かって打ち返す。
雛は動揺のあまり青年の反撃に対する対応が遅れた。

「魔符・スターダストレヴァリエ」

真横から割って入るように無数の星型の弾が、青年の厄を包み込み青年の攻撃を打ち消す。

「この攻撃は！」

雛は攻撃してきた主を見る。

黒い帽子と服。金髪の少女。

東洋の西洋魔法使い、霧雨魔理沙だ。

「女の子に手を上げるなんて男として最低だぜ」

そう言ってミニ八卦炉を青年の方に向けている。

「お前！」

青年の注意が魔理沙に向く。

「雛、大丈夫！」

にとりが雛のところに走る。

「にとり。あなたが彼女を呼んだのですか」

「そうだよ。彼を止めるのは魔理沙が適任だから」

そう言って魔理沙の方を向くにとり。

魔理沙はなぜか気まずそうに視線をそらす。

「さて、どうする？三対一だぜ」

「どうもしない、このまま俺は厄を集めながらそれを周囲に振りまく」

「それがお前の、復讐、だからか」

「そうだ」

青年は魔理沙の質問に短くそう答える。

「復讐なんてつまらないぜ」

「黙れ！！」

大声で怒鳴る青年。しかしその表情が苦痛に歪む。

「くそ、ここまでが限界か」

そう言うと青年は意味不明の言葉を呟き始める。

それとともに青年の足元に魔方陣が現れ、青年は姿を消した。
その魔方陣が消えるまで魔理沙は険しい表情でそれを見ていた。

2－1　『原因と結果』

霧雨魔理沙は常日頃魔法の研究をしている。
それは魔理沙という人物が魔法に関しては一切の妥協なく、努力と精進を積み重ねているからに他ならない。
もっともその努力と精進が時として周囲に迷惑を掛けることもあるのだが。
「それでだ、私も幻想入りのことを調べたくなってさ。霊夢のところから「境界と結界」って本を借りたわけだ」
「盗んだの間違いでしょう」
そう言ってお茶をすする巫女は、博麗霊夢だ。
ここは幻想郷と外の世界の境界・博麗神社だ。
青年が去ったあと、雛はにとりに事の説明を求めた。
雛を人里に向かわせたことと、魔理沙を呼んだことは明らかに関係あるからだ。
「ちょっと長い話になるし、分かりやすく話すために博麗神社に行こう」
そう言ってにとりに連れられ雛は博麗神社に来た。
そこには先に来ていた魔理沙とやや不機嫌そうな博麗霊夢がいた。
客間で四人はお茶を飲みながら魔理沙の話を聞いているところだ。
「最初は何が書いてあるのかピンと来なかったが、境界を破って外の世界と交信する方法ってのを見つけたんだ。それでその方法を試している内に外の世界の人間と会話が出来るようになったんだぜ！」
すごいだろう！そんな表情で一同を見る魔理沙だが周囲の視線は冷たい。
そこへ霊夢が口を開く。
「それでその会話できる相手って言うのはどんな人なの？」
「それはさっき雛たちが見た青年だ」

なぜか胸を張って魔理沙は答える。
「はあ」
霊夢は短くため息をつく。
「つまり魔理沙がその厄を集める人間をこの幻想郷に連れてきたって事ね」
そう言って半眼で魔理沙を見る霊夢に魔理沙は反論する。
「それは正解じゃない。いや半分正解か」
「どういうこと？」
「確かに私はあの厄使いの青年と連絡を取った。しかし厄使いの青年が幻想郷に来たのは私の力ではなく、あの人間自身の力だ」
その言葉を聴いて霊夢の表情から余裕が消える。
「ちょっと待って、つまり外の世界の人間が自力で幻想郷に来たって事？」
「だから半分は正解だ。境界を操る程度の能力を持っているならまだしも、そうじゃない者が異なる世界に行くことは出来ない。それは自分の住む世界と異なる世界に行くには「道」があるわけでも「地図」があるわけでもないからだ」
魔理沙の説明に霊夢が割ってはいる。
「けれど、一つだけ「道」にも「地図」にもなるものがある」
「その通り。それがその世界の住人とコンタクトを取ることだ。そうして自分の行きたい場所決めれば魔術の力で行くことができる」
「もっとも「道」や「地図」を見つけたからと言っておいそれと境界を越えることは出来ないけれどね。運が良かったのか術師として強い力を持っている者なのか」
思案する霊夢。
少し前に霊夢は厄を広める幻想入りした人間の話を聞いた。その厄使いの人間は周囲に災いを広めまわっていると聞き、霊夢は事件としてその人間のことを調べることにした。そんな矢先に魔理沙が、にとりたちが話をしたいと持ちかけられた。
事件の原因である魔理沙にやや不満を持つ霊夢だが、とりあえず

事件解決が優先なので思考を切り替える。
そこへにとりが会話に入ってくる。
「魔理沙はあの青年と初対面だったみたいだね」
「ああ、いつも通り「会話」をしているとあいつが頼みがあるって言ってきたんだ。新しい魔術の実験をしたいってね。
その実験は境界を越える魔術の実験でかねてから私も研究したいと思っていたんだ。それで協力した結果いきなり爆発が起きて、そこへにとりが私の家にやってきたんだ」
そう言ってお茶をすする魔理沙。それと代わるようににとりが話す。
「あの時はびっくりしたけどね。それからしばらくしてからの事だったよ、人里で厄を振りまく人間がいるって。最初は半信半疑だったけどその姿を見てこの幻想郷の人間じゃないって思ったんだ。
で、魔理沙の話を思い出して、もしかしてって思ったんだ」
「それで魔理沙を呼んだのね」
先ほどから魔理沙を不機嫌な表情で見ていた、雛はやっと口を開く。
「うん。相手が厄使いって言うのは分かっていたから雛に協力してほしかったんだ。私じゃ厄を向けられたら一溜まりもないからね」
「どうして始めから本当のことを言ってくれなかったの？」
にとりの方を向いて雛は話す。雛の厄は雛自身の制御と霊夢の結界によって抑えられ、周囲に影響が出ないようになっている。
霊夢がこういった芸当ができるとわかっていたから、雛は博麗神社に来る事が出来たのだ。
「確証がなかったから、言えなかったんだ。ごめん」
そう言ってしょんぼりするにとり。
その姿を見て雛はそれ以上にとりを責めなかった。それよりも雛の不満は魔理沙にある。
「あなたは自分がどれだけ大変なことをしたのか分かっているのですか？！」

「分かっているって、けれど起きてしまった事を悔やんでも仕方ないだろう」
雛はさらに不機嫌になるが、そこへ霊夢が口を挟む。
「まあ、魔理沙の処罰はとりあえず置いて、当面はその厄使いをどうするかね」
「え？」
雛はそんな間の抜けた声を上げる。
「彼は魔方陣に乗って外の世界に戻ったわけじゃないわ。境界を越えるってことはそんなに簡単に出来ることじゃないわ。厄使いはどこかに隠れているはずよ。そしてその厄使いの目的は…」
「…復讐って言ってましたわね」
一同は魔理沙を見る。
この中で一番厄使いの青年に詳しいのは魔理沙だ。
「ああ、あいつ周囲の人間からだいぶ迫害されてきたみたいでさ。そいつらを見返したいって言ってたな。私はそう言う反骨精神は好きだぜ」
そう言ってお茶をすすり魔理沙は話を続ける。
「詳しい経緯は知らないがあいつが知識や技術を探求しているのは復讐のためなのは確かだ。そしてその復讐の対象は外の世界も幻想郷も関係ないって事みたいだ」
「危険人物ね」
重くなる空気の中で霊夢はそう呟き、お茶をすする。
次の瞬間一同の表情が険しくなった。

2―2　『胎動する憎悪』

地面に魔方陣が現れ一人の青年が現れる。
「くそっ！！」
青年は地面に倒れこむ。土の臭いと砂が多少口に入ったがそんなことに構う余裕はなかった。
「厄を、大きくしすぎたか」
青年は自分の胸倉を掴む。
青年は魔術を独学で学んでいた。
幼少の頃から祖父がその手のことに詳しかったこともあり、青年にとって魔術は身近なものだった。しかし科学万能の現代では青年の感性は迫害の対象にしかならなかった。
そうして青年の中高時代はいじめに支配された。
親は祖父から魔術を教わった青年を疎ましく思い、出来の良い妹を可愛がるようになった。
その中で青年の心に憎しみが募っていった。
家でも学校でも仲間はずれだった青年は、高校三年のある日「約束」を破ってはじめてそれを行った。

青年が行ったこと、それは人を呪う呪術だ。

青年はいじめグループのリーダーの体の一部を手に入れ、それに呪いをかけた。
効果はすぐにでた。
いじめグループのリーダーは体調を崩し、また交通事故に遭い重症人として五年経った今も入院している。
青年はそれ以降呪術を使っていない。

いつでも人を傷つけれると言う事実が青年の余裕となっていた。
しかしそれは大学卒業と同時に壊される。
就職活動をしていた少年は内定が決まり、普通の社会人として暮らし行くはずだった。
しかしその会社の人事担当者が運悪く自分が中学校のときのクラスメイトだった。青年を虐めていたグループの一人だ。
本心を隠しつつクラスメイトと談笑した青年だが、内定をもらったにもかかわらず入社式直前に内定の取り消しが通知された。
会社の人事課に問い合わせてみると

「失礼ですがあなたは中学時代虐めに遭っていたとか」
「それは」
対応したのはそのクラスメイトだった。
「申し訳ありませんが当社はいじめに遭うような人間を、雇う事は出来ないのですよ」
絶句した。
虐めていた原因からそう告げられたことが。
その日から青年はそのクラスメイトを呪い殺すことを考えた。
しかし対象の体の一部がなければ呪術は成功しない。
青年は対象の体の一部がなくても成功する呪術の研究をひたすら続けた。
新卒の枠を逃した青年は家族からの風当たりも強くなった。
それから青年は引き篭りとなった。
そして祖父の書庫の本を読み漁る中で大きな憎しみを育てていった。
「許さない、絶対に！全員呪ってやる」
その憎しみが幸か不幸か、霧雨魔理沙との交信を成功させた。
青年が住む世界とは異なる異世界。
そこに大いなる呪法がある。夢幻のような話を青年は信じ続け、それをついに発見したのだ。

そして青年は「幻想入り」を果たした。
「ここに来てから何の道具もなく呪術が成功する。俺がにらむだけで他人を病したり怪我を負わせたり出来る。それに」
そうして自分の周囲に取り巻く人形たちを目にする。
「なぜか俺の周りを取り巻く人形。どうやらこいつらが俺の呪力を高めてくれているらしいな」
人里の村人たちの反応を見る限りこれらの人形は「厄神」と言う神に仕える「流し雛」と言う人形とのことだ。
そして自分と同じ他人を呪うことが出来る少女が存在すると言う。
それを聞いて青年はその少女に興味を持った。
そして運よくその少女に会うことができた。
「あの女は俺の力を更に強くできる。そうすれば俺が味わった苦しみと同じ苦しみをすべての人間に味わせてやることが出来る」
休息をとり体調を取り戻した青年は立ち上がる。
ふと視界に神社が目に入った。
厄をはらう神社。
そこを潰せば厄を払うことが出来なくなり人々は更に不幸になる。
「まずはあの神社を潰してやる！」
そうして青年は立ち上がり、歩き出す。
青年の心にはただ目に映るものを攻撃すると言う破壊衝動しかなかった。目的は青年にとって攻撃を行う名目に過ぎず、大義名分でしかないのだ。
青年は博麗神社へと向かっていった。

2―3　『神様の使命』

博麗霊夢、河城にとり、霧雨魔理沙そして鍵山雛は、大きな厄がこの博麗神社に向かってきているのを感じていた。
「どうやらあちらさんから現れてくれたみたいね」
霊夢が面倒くさそうに頭をかく。
しかしもう片方の手にはちゃっかりスペルカードを握られていた。
「少し待ってください霊夢さん」
「？」
雛は霊夢を制して魔理沙のほうを向く。
「魔理沙さん一つお聞きしてよろしいですか？」
「何だ？」
「なぜ彼は私と同様の厄神の力を持っているのですか？」
「さて、それは私にも分からない。ただあの厄使いの人間は幼少の頃から魔術、殊更呪術に長けていたらしいぜ」
「呪術、ね。あまりいい響きじゃないわね」
そう言って霊夢は嘆息する。
「なるほど、そう言うことでしたか。霊夢さんこの件は私に任せてもらえないでしょうか」
「え？構わないけど、どうして？」
霊夢はすんなり了承してそう問いかける。
にとりには雛が何と答えるか分かっていた。
「厄を集め人々を守る、それが私の使命です」
雛はにとりの思った通りの返事をして、霊夢に結界を張るようにお願いをしてから、厄使いの青年の場に向かった。

2－4　『呪と厄』

雛は青年を視認できる距離までに来ていた。
同じく青年も雛を視界に入れる。
「あんた、厄神様か」
「そうです。私は鍵山雛。厄を集め厄から人々を守る八百万の神の一柱です」
「神だろうが関係ない。あんたの厄は俺の呪術の糧にさせてもらう」
「やはり、人間が厄を集める場合ろくな事を考えない。おおかた呪術によって自分に降りかかる災厄も「生贄」を使って回避しているのでしょう？」
青年は目を見開き驚く。
呪術には必ずリスクがある。
人を呪わば穴二つ。
呪術を行ったものはそれが成功しようが失敗しようが何らかの形で、災厄が降りかかる。
しかしそれを回避する手段として古来から呪術師たちは「生贄」を使ってきた。
早い話が己に降りかかるべき災厄を他人に肩代わりしてもらうと言う方法だ。
「あなたは他人の不幸しか望んでいない。そのような輩は厄神として放っておけません」
「他人の不幸を望んで何が悪い」
「！？」
雛は青年の黒い瞳の中にある黒い感情がさらに増していくのを感じていた。
「他人は俺を不幸にしかしなかった。だから俺も他人を不幸にさせる。自業自得だろう？そいつらは俺の不幸を望んだ。だから俺も

そいつらの不幸を望むのが道理だ」
「そのような道理はありません！！」
雛は叫ぶ。
青年の瞳を見ればどれほどの悲しみと憎しみが渦巻いているかが分かる。だが雛は青年の主張を容認するわけには行かない。
「あなたが他者の不幸を望むと言うなら、私にもその不幸をぶつけてみなさい！！」
雛はスペルカードを取り出す。
「端からそのつもりだ！」
青年は聞き取れない意味不明の言葉を唱える。
それと同時に青年の周囲に今まで隠れていた流し雛の人形たちが現れ、雛に向かって厄を振りまいて来た。
一方雛の周囲に赤い人魂と青い人魂が浮かびあがり、八方に厄を放つ。
二つの人魂から放たれた厄は人形の厄を打ち破る。
「！！」
「厄神として人に負けるわけにはいきません」
続いて雛自身から厄が放たれる。
二つの人魂と自身から放たれる三段構えの厄攻撃、それが雛の通常攻撃だ。
通常攻撃とは言え、回避不能に思えるその弾幕は、隙間なく青年を襲う。
しかしその攻撃を青年はかわし続ける。
「なかなかやりますね。ではこれならどうです？」
「！」
青年は雛の手に握られたものを見る。
スペルカード。
この幻想郷での戦いの道具。そして使うもの自身を表す力だ。
「厄符・バッドフォーチュン！！」
雛の厄が漢字の「厄」の字を思わせる形となって、周囲に拡散す

る。
「食らいなさい！」
そして厄は青年のほうに向かって一気に収束していく。
「くそ！交わしきれない！」
青年は人形を身代わりにする。
一体、また一体と身代わりとなる人形が減って行く。
「いつまでも人形を身代わりにしているだけではこのスペルカードから逃れられませんよ！」
雛の容赦ない攻撃に青年は追い詰められる。
人形も集めた厄ももうすぐ底が尽きる。
「こんなところで！！」
青年の心に何かが湧き上がってくる。
青年はそれが何なのか知っていた。
自分が追い詰められた時、誰も手を差し伸べてくれなかった時、助けを求めた手を払われた時…そのすべての時に沸き上がる感情。

憎しみ。

「うおおおお！！！！！」
青年は残った厄を一点に集中させる。その厄は青年の憎しみを糧にするかのように大きくなっていった。
「消えろおおお！！！」
青年は厄の塊といえるそれを雛に向かって投げつける。
黒い球状の厄。
雛はそれを

「あなたの厄をもらいますわ」

自分の厄として吸収した。

2―5　『陰陽』

世界は光と闇、白と黒、プラスとマイナス、陰と陽。
相反する二つの力を基礎に成り立っている。生命がその息吹を育むということは、同時に他の生命を奪っていると言うことだ。
植物が育つと言うことは地面から栄養を吸い取っていると言うことだ。
成長と強奪。生と死。
それらはコインの裏表のように背中合わせで存在している。
人間も同様だ。日々生きていれば植物を採取し、動物を狩り、それらを食べて生きていく。
そういった生きると言う「プラスエネルギー」から生じる「マイナスエネルギー」を「厄」と呼ぶ。
雛は人々が生きることで生じる「マイナスエネルギー」を集め、人々の生活を守ることを使命とする神だ。
それをつらいと思ったことは無い。それが己の使命であり存在意義だ。
だから目前の青年の厄も己が引き受けて当然の事と思っていた。
青年を逆上させて追い詰め、厄を攻撃手段として全力で放ったとき吸収するつもりだった。
その行為に迷いは無い。
だが雛は青年の厄を完全に吸収することが出来ず、青年の攻撃をまともに食らってしまった。
「きゃあああ！！」
雛の服に無数の裂け目が刻まれていく。
「ぐっ！」
そしてそのまま地面に倒れる。
「そんな！どうして、厄は全部吸収したはずなのに」
自問自答する雛に青年は追撃をかける。

「あんたの厄をもらう」
「！」
青年の手が雛に伸びる。
しかし雛と青年の間に割り込むようにお札が投げつけられ、それを回避するために青年は後方に跳ぶ。それは雛から離れる行動となった。
舌打ちをして青年はお札が飛んできた方向を見る。
紅白の巫女装束に身を包んだ少女、博麗霊夢が立っていた。
「どうやら厄神様の手に負えなかったようね」
霊夢はそう言って青年を見る。
「話は聞かせてもらったわ。あいにく私はそこの厄神みたいに優しくないの」
霊夢は懐からスペルカードを取り出す。
「あなたがどれだけ不幸な目に遭ってきたか知らないけど、災いを振りまくと言うならここで潰させてもらうわ」
凄まじい威圧感が、外見で判断するなら青年よりも幼いであろう少女から放たれていた。
「お前も俺を不幸にするのか。良いだろうなら俺は憎しみをさらに募らせるだけだ」
「甘えないで」
厳しい口調で霊夢は言う。
「苦しい思いをしてきたのはあなただけではないわ。けれどもそんな境遇でも真っ当に生きている人もいる。あなただけが特別じゃないの」
「何だと」
「あなたはただ怠けているだけよ」
「お前に何が分かる」
「分からないわ。分かることは一つだけ」
青年は霊夢を凝視する。
「あなたはここで私に倒されるのよ」

そうして博麗霊夢は高らかにスペルカードの名を宣言した。
「神技・八方鬼縛陣！！」
霊夢を中心にして光の柱が出現する。霊夢を守ると同時に近づくものを攻撃する攻防一体のスペルカード。
容赦ないその攻撃に雛との戦いで弱っていた青年は成す術もなく霊夢の攻撃を受けるしかなかった。
「きゃ！」
だが霊夢がスペルカードを宣言した隙に青年は雛の背後に回り、首を締め上げる。
霊夢と自分の間に雛を挟み、盾としているのだ。
「女の子を人質にとるなんてね」
「何とでも言え、勝てば官軍だ」
膠着するかに見えた二人だが、突如青年の腕に激痛が走る。
「ぐああ！」
痛みで青年は雛を放り出してしまう。
放り出された雛はバランスをとり、青年から距離を置く。
そこから少し離れた場所にいきなりにとりが現れた。
「どう、私のスペルカードは？」
光学・オプティカルカモフラージュ。術者に光学迷彩を施すことが出来るにとりのスペルカード。
本来は姿を消して弾幕で攻撃するのだが、こうして姿を消すだけでも十分に使うことが出来る。
「くそ！」
「終わりね」
霊夢はスペルカードの力を解放した。
神技・八方鬼縛陣、接近戦ヴァージョン。それに触れたものは大ダメージを受ける。
光の柱でダメージを受ける中で青年は意識を失っていった。

3－1　『困惑の厄神様』

厄使いの青年の騒動の翌朝。
鍵山雛は博麗神社にいた。
にとりと魔理沙も神社に泊まったが、今はもういない。
神社には霊夢と雛がいる。今は雛が休み、霊夢が青年の監視を行っている。
「まったくどうすればこんな力が身につくのかしらね」
霊夢は布団の上で横になる青年を見てそう言う。
青年の四方にはお札があり、部屋の隅にもお札が貼られている。
結界だ。
青年が気を失った後、霊夢たちは青年を神社に運ぼうとした。
しかし気を失ってもなお青年からは厄が放たれていた。
「無意識であっても「厄を集め周囲に振り撒く程度の能力」と言ったところかしら」
霊夢は青年を見てそう称した。
結局厄に対して一番耐性のある雛と厄除けマシンを搭載しているにとりが、青年を抱えて神社まで運んだのだ。
霊夢が布団の中で眠る青年を監視していると雛がやってきた。
「容態はどうかしら？」
「眠ったままよ」
霊夢は視線を動かさず返事をする。霊夢が青年のことを警戒しているのは雛にも分かることだ。霊夢だけではない、にとりも同じように青年のことを警戒している。
無理もないだろう。
ただ一人例外なのは魔理沙だ。
「じゃあ私は一旦帰るから。そいつが起きたら教えてくれよな！」
そう言って箒にのって帰って行った。どうやらこの状況を楽しんでいるようだ。

まったく反省のない魔理沙に雛は怒りを通り越して呆れてしまった。
霊夢いわく
「まともに怒るだけ無駄よ」
とのことだ。
「霊夢さん、監視の当番交代しましょう。昨日からあまり寝てないでしょう？」
「そうねさすがに眠たくなってきたわ」
「私なら昨夜十分に寝ましたから霊夢さんも休憩を取ってください」
「それじゃあお言葉に甘えさせてもらいましょうか」
そう言って霊夢は部屋から出て行った。
雛は霊夢が座っていた場所と同じ場所に座り青年を監視する。
目立たない外観。黒い髪。寝顔だけ見れば少年といえなくもない顔立ち。
そして黒く深い憎悪の瞳。
「どれほどの厄を受ければここまでの憎しみを募らせるのでしょうか」
雛は短くそう呟いた。
そうして雛は青年を神社まで運んだ時の事を思い出す。
青年を雛とにとりが左右から支え、にとりの機械で後方から青年の尻を持ち上げる。
そのおかげで二人の少女が大の大人を神社まで運ぶことが出来たのだ。
とは言え雛は厄神と言っても、力は普通の女の子だ。
にとりが機械で青年を支えてくれていたとは言え、少女二人が青年を背負って神社まで運ぶのは一苦労だった。
その時は運ぶことだけで頭が一杯だったが雛は今更ながらに、その事の重大さを思い出す。

「あんなに長い間、男の人に触ったのって始めてね」
雛は近づけば厄に取り付かれてしまう厄神だ。
雛の傍に近寄るものは神様の中でもほとんどいないくらいだ。
人間の男性に触れ合うのが初めてなのも当然の事だ。
硬い骨格、自分を押しつぶすかのような重量、そして人肌の温もり
雛には体験したことの無いものばかりだった。

「はっ、いけない。何を妄想しているのですか私は！」

我に返り雛は青年を見る。
憎しみに取り付かれた青年。寝顔だけ見ればどこにでもいそうな青年なのだが。
「彼の心は闇に支配されている」
厄神である雛は厄のエネルギーが視認できる。靄のようなものが人の周りにかかっており、人によってその靄の色や形は違う。
その違いでその人の厄がどう言うものかを判断する材料にもなる。
青年の靄は
「深く、ただひたすらに黒い靄が彼を覆っている。一片の光も無い漆黒の靄。けれど」
ふと、雛と青年の目が合う。
「！！！」
雛が声を上げる前に青年はすばやく上半身を起こして、雛の喉元を腕で鷲掴みにする。
「う…」
青年はもう一方の手を回し、力一杯雛の首を絞める。
「や、めなさ、い！！」
雛は全力で厄を放つ。
それは物理攻撃となって青年を弾き飛ばす。
「ぐっ！」

青年は壁にたたきつけられ畳の上に倒れ伏す。
「けほ」
咳き込む雛だが、視線を青年から外さなかった。
青年が聞き取れない言葉を言い始める。雛にはそれが呪文の一種だと推測できた。
青年の周囲にある黒い靄が増幅しているからだ。
そして青年の手の中にあるものを見る。
「私の髪の毛、いつの間に」
弾き飛ばされた時だろう。青年は雛の髪の毛を引き抜いていたのだ。
「抜け目の無い人ね。それで私を呪うと言うのかしら？」
雛は背筋をまっすぐ伸ばして立ち、青年を見ている。
青年は呪文を続けている。
「やれるものならやってみなさい。厄神が呪われるなど笑い話です。あなたがどれほどの呪術師か知りませんが、神を呪うと言うなら相応の代償を覚悟しなさい」
「…」
青年は呪文を唱えるのを止める。
呪文が唱え終わったのか、雛の脅しに屈したのか。
雛には判断が付かなかったが、雛の発言は脅しでも何でもない。
厄をつかさどる厄神に「呪い」という「厄」をぶつけても雛の力を増幅させる結果にしかならず、しかも術師にその呪いが返っていくのが関の山だ。
雛の毅然とした立ち振る舞いに青年は動かないでいる。
「どうしました、私を呪うのではないのですか？」
雛には徐々に青年の感情が読み取れてきた。
青年は呪術を行う際のリスクを考えているようだ。
雛が厄をつかさどる神ならば呪いをぶつけても意味は無く、自身に呪いが返ってくるのではないか、と。
昨日の戦闘で青年の厄を吸収しようとした雛のことを考えれば、

可能性は大だ。
そう考えていることに雛は少し安堵する。リスクを計算する理性は残っているということだからだ。
「私はあなたに危害を加えるつもりはありません。あなたが周囲に厄を振り撒かないならば、これまでのことは水に流して歓迎いたします。ここは幻想郷。すべてを受け入れる場所です」
雛は出来るだけ優しく話しかけた。
青年は雛のその態度を見て少し緊張が緩んだようだ。もっとも警戒心はまだ解かれていないが、だが。
「う！」
青年は突如胸を押さえて膝を突く。
「大丈夫ですか！」
倒れた青年に駆け寄る雛。
「触るな！」
そう言って雛を避けようとする青年だがその腕に力は入らず虚しく空を切り、再び畳の上に倒れ気を失った。

3－2　『厄神様の沈痛』

青年の父は医者だった。母は看護婦で、共に人の命を助ける仕事に就いていた。青年も親の影響を受け医者の道を志していた。

しかし青年は医者にはなりたくなかった。

「人のために生きなさい」

そんな親の教育に納得がいかなかった。自分は好きなことをしたい。仕事で自分と遊べないくらい忙しい親と同じ仕事に就きたいと思わなかった。

けれども青年は学校の成績は良く、教師からも優等生として信頼されていた。

しかしその信頼は中学に上がりいじめにあった事で一変する。

優等生から落ちこぼれ、さらには不登校までになった。

何とか中学を卒業して高校に上がっても青年への周囲からの反応は変わらなかった。いじめられるだけの日々。学校へ行くことを拒めば親は渋い顔をして「俺の、私の子供なのに」そう呟くだけだった。

そして次に言うことは決まっていた。

「父さんが…に不健全なことを教えたのが原因かもしれない」

「そうね。義父さんは…に甘かったから」

青年にとって祖父は尊敬する人物だった。

その祖父を悪く言う親が信じられなかった。

青年が小学五年の時に祖父は他界した。心臓発作が死因らしい。

青年にとって両親は自分と自分の尊敬する人を貶める人でしかなくなった。

「呪い殺したい！」

そう思ったことは何度もあった。しかしそれを行わなかったのは祖父との「約束」があったからだ。

「我々呪術師は呪術を使って人を不幸にしてはいけない。特に呪

殺など絶対にやってはいけない罪深いことだ」
その祖父の教えが青年の唯一の倫理観として存在していた。
しかし高校の時に青年はその倫理観を自ら破り、クラスメイトを呪術によって不幸にしてしまった。殺さなかったのは良心が働いたのか、それともただ殺すだけでは積年の恨みが晴れなかったからか、その理由は青年自身にも分からない。
一つ確かなのはそれから青年のタガが外れたということだ。
殺しはしないものの、それから幾度か呪術を使って人を傷つけた。
同じクラスでいるならば生徒はおろか教師ですらも落ちた髪の毛などを拾うことのは容易い事だった。　そうして青年は着々と呪術師としての力をつけて行った。
「う」
「気がつきましたか」
意識を取り戻した青年の視界に雛が入る。
黒と赤を基調にしたゴシック風の服を着た少女。横になっている自分を見下ろすその不安げな瞳が青年の知っている人物と重なり、青年は再び意識を失った。
※
一度意識を取り戻した青年が再び意識を失う光景を鍵山雛は見ていた。
「重症ね」
正座した雛の背後から霊夢の声が聞こえてくる。
雛は振り返らず青年を見続けたまま答える。
「かなりの厄を負っています。おそらくこれまで呪術を使ってきた反動でしょう」
「でもその人、生贄を使って呪術の反動をチャラにしていたんでしょう」
背後からの霊夢の言葉に雛は首を振る。
「確かにこれまではそれで回避できたかもしれません。しかし今回は無闇に厄を振り撒くことによって生贄が許容量を超えてしまっ

たのでしょう」
「厄とは生きることで生じるマイナスエネルギー。生きているだけでマイナスが生じるなんて救われない話ね」
「だからこそ厄神という神がいて、流し雛という儀式があるのです」
「なるほどね」
「プラスエネルギーが生じればマイナスエネルギーが同時に発生する。それが「生」きると言うこと。そのマイナスエネルギーを集めるのが私の役目。けれど彼はマイナスエネルギーを生み出し自他共々マイナスエネルギーの海に沈めようとしている」
「非生産的って事？」
「そうですね。けれど問題なのはそこではありません」
霊夢は首を傾げ、雛は悲壮感を漂わせて言う。
「マイナスエネルギーを広げること、それが彼にとって幸せなんです。悲しいじゃないですか。不幸を望むことだけが幸福だなんて」
霊夢は悲しい気な表情の雛から、視線を青年に向ける。
「けれどそれが彼が選んだ道よ」
「霊夢さんは厳しいですね」
雛は始めて振り返り霊夢を見る。その悲しげな笑みが霊夢の視界に入り、霊夢は自分の発言を少し後悔した。
だが霊夢は自分の意見を変えない。
「自分が不幸だから他人を不幸にしてもいいなんて話は通らないわ。そんな人間ばかりなら、毎日事件が起きているわ。
もっともそうなれば私が事件を解決しまくって、神社の信仰が戻って人々からたくさん奉納をもらえそうだけどね」
冗談か本気か分からない冗談を言って霊夢は雛の隣に座る。
「もっともあなたみたいな人間を毎日相手にするのはごめんだけどね」
「霊夢さん？」
霊夢の口調の変化をおかしく思い、雛は青年を見る。

そして霊夢の口から言葉が告げられる。
「気づいているのでしょう？起きなさい」
そう言われて、青年はゆっくりと目を開けた。

3－3　『浮上する喪失』

朝、青年は目を覚ます。
寝たのは深夜４時頃、起きたのは朝７時頃だ。
睡眠時間３時間。まあ妥当なところだ。
外の世界にいた時、青年は深く眠れなかった。その理由は大体想像は付くがそれを考えるのも億劫だった。
朝起きて考えることはいかに学校をサボるかだった。
昔風呂に入ってすぐに裸で寝て風邪を引いて休む、と言うのは実際に病気になるので学校を休めるというメリットがあるだけの最終手段だ。
腹痛や頭痛などの体調不良に訴える手段はもう通じない出来ない。
青年の朝は不安から始まる。
両親と朝から言い合いをして青年は渋々登校した。丁寧に母の車で校門まで乗せてきてもらってだ。
車で通学する自分に冷たい視線を浴びせられながら青年は登校した。
それからは危機を察知して逃げ回ることで一日が終わった。
勉強などに励む暇は無い。ただ逃げるだけだ。
漫画とかではここでヒーローが出てきたり、熱血教師がいじめっ子を改心させたりというドラマがあるのだが、あいにくとこれは現実だ。
そんな救いは無い。
青年の身を守れるのは青年だけなのだ。
また友達も作れない。
誰も信用できないからだ。友達のフリをして…そんなことは中学時代にあった。
同じ轍を踏むまいと青年は一人を好んだ。
そうこうして行くうちに一年が過ぎ、二年が過ぎた。

放課後にいじめグループに囲まれてボコされたり、下校中を襲われたりと、色々あったがいじめグループのメンバーが二人ほど高校を退学したこともあり、三年になる頃には青年へのいじめはパシリ止まりだった。

パシリと笑われても言うことを聞いていれば、平穏な日常を謳歌できるなら安いものだった。

そうして青年は大学に進学した。

当然医学部だ。平穏を得た三年でこの二年分の遅れを取り戻し、青年は大学に合格した。

ただ受験のときに青年は同じ大学を目指すクラスメイトを呪術で傷つけ、受験ライバルを減らした。青年の中にはもう祖父から与えられた倫理観はなく、いかに他者を蹴落として自分が蹴落とす側になるか、それだけだった。

「プラスエネルギーが生じればマイナスエネルギーが同時に発生する。それが「生」きると言うこと。そのマイナスエネルギーを集めるのが私の役目。けれど彼はマイナスエネルギーを生み出し自他共々マイナスエネルギーの海に沈めようとしている」

ふと青年の耳に話し声が聞こえてきた。

「悲しいじゃないですか。不幸を望むことだけが幸福だなんて」

「けれどそれが彼が選んだ道よ」

青年は意識を覚醒させ、目を閉じたまま二人の少女の話を聞く。

やがて

「起きなさい」

そう言われて青年は目を開けた。

視界に入るのは黒と赤を基調にしたゴシック風の服を着た少女と、紅白の巫女装束の少女。もっとも腋の部分が露出しているところは通常の巫女服と異なっているが。

「気分はどうかしら」

「よく気付いたな」

「質問しているのはこちらよ」
「体が重い」
青年は霊夢の質問に答える。全身が重しを付けているかのように重く、抵抗する気力が湧いて来ない。
「呪術の反動ね。あなたはここに来てから相当呪術を使っていたみたいね」
青年は天井を見上げたまま霊夢の話を聞く。
「色々と質問したいけどまずは」
「お名前は何と言うのですか」
霊夢の質問に雛が割り込む。
「ちょっと」
「名前が分からないと不便ですよ」
「まあそうだけど」
二人は青年を見る。青年は天井に視線を向けたまま何も答えない。
雛が繰り返し告げる。
「お名前を教えていただけないでしょうか？」
優しい口調で問いかける雛。青年は短く答えた。
「分からない」
「？」
「自分の名前が分からないんだ」
「そんなわけないでしょう？記憶喪失とでも言うのかしら？」
霊夢の責めるような問いかけに青年は天井から視線を霊夢たちに向ける。
「本当だ。記憶喪失というより、名前だけ忘れている感じだ」
霊夢は青年を見る。嘘を言っている雰囲気ではないようだ。
「名無しの厄使いってことね」
「厄使い？」
「あなたのことよ」
「そんな風に呼ばれていたのか。まあ呼び名などどうでもいいがな」

「でも名前が無いと不便ですよ」
「好きに呼べば良い」
短くそう言って青年は天井を見上げ目を閉じた。
どうやら眠りに入ったようだ。
雛と霊夢はそんな青年を部屋に残して部屋から出て行った。
霊夢と雛は台所でお茶を入れていた。
霊夢がポツリと口を開く。
「名前だけ覚えていない記憶喪失ね」
霊夢が呟く。
そして霊夢の思っていることを雛は口にする。
「呪術の影響、でしょうか」
「恐らくね」
呪術の過剰使用によって青年に「厄」が降りかかったのだ。名前を忘れるという厄が。
呪術による厄はどういうものが降りかかるかは千差万別だ。
青年の場合、名前を失うという厄を負ってしまったのだ。
「とりあえずこの神社に住まわせても良いけど…って何してんのよ！！」
「霊夢さん！」
霊夢が急に駆け出しその後を雛が追う。
神社には結界が張ってある。中にいる人間の行動は霊夢には筒抜けなのだ。
青年のいた部屋に行くと、布団には誰もいなかった。
「まったく！あんな状態で逃げ出すなんて」
霊夢は「勝手にしなさい」そう言って台所へ戻って行った。
一方雛は青年のいない布団を悲しそうに見つめていた。

4－1　『人と神と妖精と』

鍵山雛は厄神様の通り道に帰っていた。
青年が博麗神社を去ってから一夜が明け人里は、落ち着きを取り戻していた。流し雛の人形たちも雛の元に戻ってきている。
事件は一件落着、かと思いきや雛は戻ってきた人形を見ながらため息をついていた。
「はあ…」
そんな雛ににとりが話しかける。
「ため息ばかりついてどうしたの？」
「いえ、特にどうと言うことはないのですが」
そう言ってまたため息をつく雛。
「やれやれ」とにとりは呆れる。
「そういえば厄使いの人どうなったのかな」
「…」
「厄使いのインパクトが強くて、どんな顔だったか覚えてないや」
「そう」
雛は人形を見続けている。
そんな雛の態度に業を煮やしたにとりが口を開く。
「あの厄使いの人間に会いたいんでしょう？」
雛がにとりの言葉を理解するまで数秒を要した。
「な、ななな！！何でですか？！」
「雛、分かり易すぎだよ」
動揺する雛は必死で反論する。
「なぜ私があの人間に会いたいなど、と」
「だって人形見ながらため息ばかりついてるし」
「それは！」
「何か別の理由だったの？」
雛はぐうの音も出ない。

「私は！」
言いかけて雛は深呼吸をする。
「私は厄神です。周囲に厄を集めている私が誰かに会いに行ったとしても相手に迷惑がかかるだけです。それに彼は厄を集めて人を不幸にしようとしている。私が近づけば彼は必ず私の厄を悪用しようとするでしょう」
だから会えません。そう小さく呟き人形を見る雛。
「でも彼が厄を集めているなら厄神として放っておけないんじゃない？」
「…」
「彼が厄を悪用しないように監視するのも厄神の役目に入るんじゃない」
雛は人形を見ながら考える。
これまで雛には役目のことしか頭に無かった。それが最優先事項であり、それ以外の感情は湧いてこなかった。
しかし雛は始めて役目と同じくらい優先したいことが出来た。
「そう、ですね。厄を集める彼を放っておけませんね」
雛は立ち上がり座っている友人を見る。
「ありがとう、にとり」
そう言って雛は空を飛んで行った。
その背中をにとりは微笑ましそうに眺めていた。
一方の雛は青年がどこに行ったのか分からない。しかし雛にはアテがある。
厄神である雛には厄を視認できる能力ある。
（彼が厄を振り撒いているならば、その厄を目視できるはず）
「そこに彼がいる」
そう呟き、しばらく飛んでいると
「あれはスペルカード！誰かが戦っているの？」
派手な爆発音が聞こえてきた。
雛はその場所に向かって行った。

そこは妖が住む妖怪の森だった。
※
青年は重い体を引きずりながら歩いていた。意識ははっきりしているが、体の重さが青年の歩みを抑圧する。
博麗神社を去ってから一夜が明けた。
「追ってくる気配は無い、か」
青年は地面に座り込み、木にもたれ掛かる。
「呪術の反動か。こちらに来たときは生贄の効果はあったのだが、今はもう感じられないな」
青年は幻想郷に来る前にあらかじめ「生贄」を用意していた。自分に災厄が降りかからないように、呪術による反動を他者に移していたのだ。しかしあるときを境にその効果が感じられなくなり、青年の体調を壊して行った。
それでも青年は厄を振り撒くことを止めれなかった。
「別の生贄が必要だな」
そう考え青年はそこで少し休む事にした。しかし青年は知らない。ここが妖(あやかし)の住む妖怪の森だということを。
魔力が満ち呪術を行うに適した場所を探していると、ここにたどり着いたのだ。
重たい体を引きずり青年はとりあえず水飲み場を探した。
木々が潤う森の中でそれはすぐに見つかった。
「湖か」
青い綺麗な水面が太陽の光で輝いている。
泉の水を掬い飲み干す。
「水筒が必要だな。とは言うものの」
青年はその場に座り込み思案する。
(体調は少し時間を置けば良くなるはずだ。呪術の反動もそうだが単純に疲労の色の方が濃い。問題なのは食料だな)
青年の腹の虫が鳴る。
幻想郷に来てからほとんど何も食べていない。

厄を振り撒いている時はそれに熱中していたし、邪魔者が入ってからは何かを食べる暇も無かった。
座り込んだのは空腹のせいもある。
「あーーーーー！！」
そこへ青年の不機嫌さを刺激する声が周囲に響く。
青年は声の主を探す。
「人間だ！何しに来た！ここはアタイの縄張りだぞ！」
青い髪と瞳の少女。否、外見は少女だが人間でないことは明らかだ。
（羽が生えているし、あの羽は氷で出来てるのか？）
青年は立ち上がり、眼前の少女を見下ろす。
身長差は大人と子供ほどの違いがある。
「人間、ここに何をしにきた！」
青年の中で膨らんで行くものがあった。
（こいつも俺の邪魔をするのか）
憎しみ。
己に敵意を向けるものを青年は容赦しない。
「な、何だ！やるのかい！」
そう言って少女はスペルカードを取り出す。
青年は内心で舌打ちする。こんな少女（人間ではないだろうが）までもがスペルカードを持っている事実に。
「アタイは最強の妖精チルノ様だ！湖の平和がアタイが守る！」
スペルカードを掲げ自分の名前を暴露する少女、もとい妖精。
だが青年にはスペルカードの有無はどうでも良かった。妖精・チルノをにらみながら厄を放つ。
次の瞬間
グウウウ…
「…」

「…」
青年の腹の虫がなった。
「何だ腹が減ってるのか？」
チルノはスペルカードを掲げた手を下げ青年に問いかける。
「ああ」
青年は短く答える。
「それなら早くそう言えば良いのに。腹が減ったから気が立っていたんだな。それに気づくアタイは賢い！」
そう言って腕を組んで一人頷くチルノ。
青年はあえて反論しなかった。
空腹感が憎しみを凌駕したと言うことだ。
何より青年はチルノを見て思う…

（こいつ頭悪そうだな）

「アタイに付いておいで、食べるものがある場所に案内してやるから」
…そうして青年はチルノの後を付いて行った。

4－2　『共鳴する憎悪』

青年は森の中にある屋台にいた。眼前の少女が焼く焼き鳥ならぬ、焼き八目鰻を食べている。

余談だが青年が八目鰻を食べるのは今日が初めてだ。

「どうだい、ウチの焼き八目鰻は」

そう言って眼前の少女は感想を聞いてくる。

もちろんその少女も明らかに人間ではない。羽は生えているし、爪も異様に長い。耳も鳥のようだ。

青年は飲食店をやっているなら爪くらいは切ろ、と言いたいが、それを言う気力よりも食欲のほうが先だった。

得体の知れないものが入っているかもしれない。そう疑問に思ったが美味しそうな香りが青年の理性を奪った。

「いや～お兄さんいい食べっぷりだね」

眼前の少女は青年の食べる姿を満足そうに見つめている。自分の作った料理で喜んでもらえることは料理人としての最高の幸せだろう。

そうして青年はどんぶり一杯をあっという間に平らげた。

「ふう」

「どうだい、アタイの言った通りおいしかっただろう？」

「あんたそんなこと一言も言ってないだろう」

明るいチルノに突っ込む少女の名は、ミスティアと言うらしい。

夜雀という妖怪と言うことも青年が焼き八目鰻を食べている間に、真横でチルノが喋っていた。耳障りだったが幻想郷について何も知らない青年は、耳を傾け有用な情報を聞き取っていた。

「さて、そろそろ名前を教えてくれるかい？」

そう言ってミスティアは青年に話しかける。

青年はやや思案して素直に話すことにした。

もちろん厄については触れず、自ら望んで幻想郷に来たこと、そ

こで博麗神社の巫女にスペルカードを使ってボロボロにされたこと、そして神社から逃げてきたこと。
それら一連のことを聞くと…

「それは、大変だったね。あの巫女いつも横暴だからね」
そう言ってミスティアは泣いている。
「あの巫女はアタイ達の共通の敵だ！絶対に許せない！」
拳の握り締めて怒るチルノの姿があった。
青年は博麗神社の巫女はこの森では好かれていないと言う話を聞き、うまく利用できないかと目算していると。

「まったくあの巫女には毎回毎回ひどい目に遭わされるんだ」
「アタイもこの前スペルカード戦挑まれたけど、惨敗だった」

そういった後ミスティアとチルノは…

「ちょっと人間を食べてやようと思っていただけなのに」
「ちょっと人間に悪戯してやろうと思っていただけなのに」

…聞き捨てならない言葉が聞こえた。

「人間を、食べる？」
青年のかもし出す空気が変わる。それにミスティアは気づき、あわてて否定する。
「あ、お客さんは人間でも食べないよ。お客様は神様だからね」
そう言って破顔するミスティア。
客じゃない人間なら食べるのか。そう思ったが問いただしてはいけない気がして青年は別のことを口にした。

「ここの妖怪は博麗の巫女を良く思ってない奴が多いんだな」
「そうだよ。みんなあの紅白巫女にやられているからね」
腕を組んで腹立たしげに頷くミスティア。チルノも似た反応だ。
「それじゃあ」
俺と手を組んで博麗の巫女を懲らしめないか？そう誘おうとしたとき別の少女の声が聞こえてくる。
「そこまでよ！」
青年は新たに出てきた声の主に向ける。
金髪の少女。
西洋風の可愛らしい服を着ている。
その顔立ちは美少女と呼べるだろう、と青年は思った。一つ気になったのは、少女の背後に女の子が持つような可愛らしい人形が浮いていた事だ。
「アリス！」
チルノが少女の名前を呼ぶ。
「チルノ、ミスティア。その青年から離れなさい」
アリスの視線が青年に突き刺さる。
それで青年は瞬時に理解する。どう言う経過は分からないが自分のことがバレていると言う事を。
「霊夢がどうなろうと構わないけど、あなたのような危険人物を放置しておくことは出来ないわ」
アリスの視線は青年の沈んだ憎しみを湧き上がらせるのに十分だった。
ゆっくりと席から立ち青年はアリスと対峙する、が。
「いきなり現れて何だよアリス！」
チルノがその間に立ちはだかった。
「チルノ！その男はね！」
「この人はアタイたちの仲間だ！それを悪く言うのは許さない！」

青年はチルノの言葉に目を見開く。
そこへゆっくりとミスティアもチルノの横に立つ。
「確かに巫女に虐められたもの同士、彼は私達の仲間ですね」
何とも情けない結束だが、青年は味方が多いにこしたことは無いと考え何も言わないでいた。
「そう。それなら、一対三で良いわ」
そう言ってアリスはスペルカードを取り出した。
「やられたい方から掛かってきなさい」
スペルカードでの対戦は一対一を基本としている。
青年は静かにその場を見守っていると
「いや二対三だぜ」
霧雨魔理沙が箒に乗ってやってきて、アリスの隣に降り立つ。
「魔理沙！お前もアタイたちの邪魔をするのか？！」
「邪魔っつうか、何ていうか」
「もっと分かりやすく話せバカ！」
言葉を濁す魔理沙に食ってかかるチルノ。
魔理沙も青年が幻想郷にやってきた一因を作ったのが自分だと言えないのだろう。
「何だと！バカにバカって言われなくないぜ」
しかしチルノにバカにされたことでそう言った思慮が吹き飛ぶ。
「バカっていう奴がバカなのさ！」
「チルノの相手は私がするぜアリス」
「どっちもどっちね。すると私の相手はあなたなのかしら」
そう言ってミスティアを見るアリス。
「そうみたいだね。隣の二人のとばっちりを食らわないように少し離れて戦おうか」
「そうね」
四人はそれぞれ空中へ飛んで行った。
その中で一人青年はその光景を黙ってみていた。

4－3a　『星ｖｓ氷』

四人は空中に移動すると早速スペルカード戦を始めた。
「先手必勝だぜ、魔府・ミルキーウェイ！」
霧雨魔理沙がスペルカードを宣言すると魔理沙の中心に九つの星型の弾が孤を描きながら九方にばら撒かれる。
しかしチルノの小柄な体には比較的大きな隙間の弾幕だ。
「こんなのは簡単さ」
チルノはそれを軽くかわして反撃に移る。
「凍府・パーフェクトフリーズ！」
ランダムに撒かれた氷の弾は魔理沙を囲むようにその場にとどまり動かなくなる。相手の動きを制限してから氷の弾で追撃をかけるスペルカードだ。
それをかわして魔理沙はスペルカードを取り出す。
だが次の瞬間とまっていた氷の弾が動き始める。静と動のスペルカード。それが凍府・パーフェクトフリーズの真骨頂だ。
「軽い軽い！」
それを魔理沙を軽々と交わす。
「こいつはどうだ！魔符・スターダストレヴァリエ」
霧雨魔理沙が新たにスペルカードを宣言すると、魔理沙の周囲に七つの魔方陣が出現する。その七つの魔方陣から星型の弾がそれぞれ孤を描き放たれる。
チルノと魔理沙を包むように放たれた星型の弾は魔理沙の指示ひとつでチルノに向かって収束して行く。
ある弾は交差しあい、ある弾は拡散し、結果的の背後を断ち、前方から追い込むという「弾幕の檻」が出来る。
幻想的な星の輝きとは裏腹な効果だ。
「うわわわわ！」
チルノは慌てて弾幕の隙間を見つけて回避しようとするが、被弾

してしまう。
「私の勝ちだな」
「ちくしょー」
こうして一つの勝負はついた。

4－3b　『人形ｖｓ夜盲』

チルノが魔理沙と戦っている一方で…

「声符・梟の夜鳴声！」

…ミスティアがスペルカードを宣言する。

紫と水色の羽が円形に発生する。紫の羽は反時計回りに、水色の羽は時計回りにそれぞれ回転しながら広がって行く。

左右に広がった羽は敵のいる場所で交差し、左右から挟撃を仕掛けるスペルカードだ。

「軽いわね」

アリスはそれを一歩引き、またある時は一歩前に進むことで回避する。

「こちらの反撃よ」

アリスはスペルカードを宣言する。

「紅符・紅毛の和蘭人形！」

アリスの周囲に数体の人形が出現する。

人形を中心に、花びらをイメージするかのように、七つの方向に向かって弾幕が放たれる。一つ一つは範囲の小さな弾幕だが、複数の人形から放たれる弾幕は敵を追い詰めるように入り混じり、敵の行動範囲を制限する。

いわゆる頭数での攻撃だ。

「なんの！」

ミスティアはそれを次々とかわして行く。

そして続けてスペルカードを宣言する。

「夜盲・夜雀の歌！」

アリスの視界が一気に狭くなる。

「夜雀の得意技ね」

夜雀。人を鳥目にして視力を奪う妖怪。

ミスティアのこのスペルカードは夜雀と言う妖怪を象徴するよう

なスペルカードだ。
相手の視界を狭くし、弾幕を大量にばら撒く。
視界が狭くなった相手は弾幕が避け辛くなる。
しかしアリスはそれを難なくかわしてしまう。
「そんな！」
「驚くことじゃないわ。確かに夜雀の特性は脅威だわ。けれどそれに反してばら撒かれる弾幕は隙間だらけ。自分の正面だけを見て隙間を見つけて交わして行けばいいことよ」
そう言ってミスティアのスペルカードを解説したアリスは、視野が戻り反撃に移る。
「蒼符・博愛の仏蘭西人形」
静かに宣言されたそのスペルカードによって六体の人形がアリスの周囲に出現する。それぞれ扇状に弾幕を広げるが、それはなぜかアリスに向かって放たれた。
「どこに向けてんだい？」
余裕な表情のミスティアだが、次の瞬間弾幕は逆方向に向きを変える。
「！」
内側から外側に向いた弾幕は一瞬、六芒星の形となって周囲に拡散しミスティアを襲う。
「うわわわあああ！！」
ミスティアは目算を狂わされ回避行動が遅れる。
「終劇ね」
短くアリスはそう言って被弾したミスティアを見下ろした。

４－４　『厄神様の提案』

鍵山雛が付く頃にはスペルカード戦は終わっていた。
そしてそこには魔理沙とアリスが青年を見ていた。
雛が地面に降り立つと魔理沙とアリスの視線が雛に向く。
「おう、雛じゃないか」
魔理沙が雛の名前を呼ぶ。
するとアリスは不機嫌そうな声で「誰？」と魔理沙に問いかける。
「彼女が話していた厄神様だ」
「へえ、あの山の神様の一人って奴」
アリスは雛と初体面だ。
一方魔理沙は雛にアリスを紹介する。
「雛、彼女が人形遣いのアリスだ」
「あら、この方が？」
雛は以前魔理沙に会ったときに幻想郷の人間について色々と話を聞いていた。
厄神として山からほとんど動かない雛には魔理沙の話は、子供が聞く御伽噺のような魅力的な話ばかりだった。そのなかに七色の人形遣い、アリス・マーガレイドの話があった。
その様子をアリスは不機嫌そうに見ていた。
「ちょっと魔理沙、私の知らないところで一体何て言ったのよ」
「え？アリスは頼りになる私の相棒って言っただけだぜ」
「なっ！」
アリスは赤面する。
それを見て雛は直感する。
（この人魔理沙さんの事が好きなのね。物好きな女性もいたものだわ）
雛はそう内心で独白する。
「それでどうしたんだ雛」

魔理沙の急な問いに雛はビックリする。
「え、いえ、その…そう！散歩をしていたら派手なスペルカード戦があるじゃないですか。それで様子を見に来たら、皆さんがいたんです。一体何があったのですか？」
雛はアリスと魔理沙を見てから青年を一瞥して、再び視線をアリスと魔理沙に向ける。
「散歩してたら、ね」
アリスは直感で雛の嘘を見破る。恐るべしは女の勘だ。
雛はそんなアリスの視線を無視して会話を続ける。
「見たところ二人がかりで人間を襲っているようですけど」
「私も人間なのだが」
「あなたは例外です」
魔理沙の突っ込みを一蹴する雛。
代わりにアリスが話を進める。
「彼は厄使いの人間よ。普通の人間じゃないわ。話は魔理沙から聞いているわ。単刀直入に言うけど私達は厄使いの彼を元の世界に戻したいと考えているわ」
「え？」
それは雛にとって意外な一言だった。
山にずっといる雛でも、にとりや魔理沙から「幻想入り」の話は聞いている。外の世界から来た者たち。そして幻想入りした者たちのほとんどが帰れずに幻想郷にいることも…。
「元の世界に？」
「そうよ。私と魔理沙、そして博麗神社の巫女の力を使えば可能なはずだわ。他にも手伝ってくれそうな人もいるし。各々の力を集結すれば不可能じゃない話のはずよ。けれどその前に」
アリスは青年を見る。
「彼の身柄を拘束する方が先だけどね」
敵意のこもった目で青年を見るアリス。
青年はアリスに対して短く答える。

「俺はここでやる事がある」
その言葉がアリスを逆上させた。
「あたながいると迷惑なのよ！力ずくでも出て行ってもらうわ！」
アリスのような瞳をした者を青年は知っていた。自分を疎ましく思う者の瞳。それは青年の憎しみの栄養剤となる。
「どうしても言うことを聞かないなら力ずくでもそうさせてもらうわ」
そう言ってスペルカードを出すアリス。
そこへ魔理沙が割って入る。
「おいおいアリス、相手はスペルカードを持っていない人間なんだぜ。そんなのアリスが勝つに決まっているじゃないか」
「そ、それは」
魔理沙の言葉に戸惑うアリス。
幻想郷での決闘や争いごとはスペルカード戦と決まっている。しかしそれは幻想郷のルールであり、幻想入りした外の世界の人間にはそういった能力は無い。
その中で青年は一歩前へ出る。
「俺は構わないぜ、俺に敵意を向けるって言うなら返り討ちにしてやるまでだ」
「何ですって？」
こめかみをひくつかせるアリス。
戸惑う雛の脳裏に名案が浮かんだ。
「では皆さんこうしましょう！」
指を立ててそう提案する雛の姿を見て、魔理沙は「今のポーズちょっとかわいいな」などと暢気なことを考えていた。

5－1　『タッグスペルカード戦・前編』

妖怪の森の上空。魔理沙と雛は空中に浮いていた。
魔理沙は箒に乗っており、その背後でアリスが座っている。
一方それと対峙するように雛が浮いている。
雛の手には人形を抱くように青年を背後から掴んでいる。
雛が提案した特殊ルール。
アリスは魔理沙の箒に乗って、そして青年は雛が掴んでそれぞれ空中でスペルカード戦を繰り広げるというものだ。
青年は飛行能力を持っていない。そしてスペルカードも持っていない。
そこで飛行する役と攻撃をする役を作り、空中戦をしようと言うのだ。
そしてスペルカードを持っていない青年はアリスの攻撃をかわし切るか、呪術で攻撃して被弾させるかで勝利条件とする。
アリスは「魔理沙の箒に乗ったまま」、青年を被弾させれば勝ちだ。
「じゃあこの条件でいいわね」
「ええ」
雛の問いかけにアリスは短く返事をする。
「では三分間の作戦タイム後に、合図後に開始です。合図、お願いします」
「了解！アタイに任せな！」
そう言って親指を立てるチルノ。その横でミスティアもいる。
その光景を見て魔理沙は小さく呟いた。
「それにしてもいつも大人しい雛がこんな面白い事を提案するなんてな」
「何、気づいてないの魔理沙？」
「へ？」

雛の気持ちに気付いていない様子の魔理沙に、アリスは「鈍感」と短く文句を言って作戦タイムに入った。
一方雛は青年を抱きかかえていた。
飛行能力で青年の重みはほとんど感じない。
そして雛の厄はそのまま青年の呪力に還元され、また青年の厄も雛の周囲に集められる。まさに補完し合う関係だ。
しかし雛には納得がいかないことがあった。
厄を集める厄神である自分が、以前青年の厄を集めきれなかったことだ。
それは厄神である雛にとって見逃せない事実だ。
そのことを追求するために雛は青年と共同戦線をはることにしたのだ。
「あんたも物好きだな」
そんなことを考えていると青年から話しかけてきた。
「俺なんかの手助けをするなんて」
「何を言っているんですか、私たちは似た能力を持った仲間じゃないですか」
「…」
青年の沈んだ瞳が雛の視界に入る。
（この人は誰も信用しようとしていない）
そう感じて雛は悲しくなる。
しかし雛がそんな悲しみにくれる暇もなく青年は問いかけてくる。
「俺の言うとおりに動けるのか」
「ええ、大丈夫です。飛行能力であなたの体重はほとんど感じません。自分が飛ぶようにイメージをして指示を出してください」
「分かった」
こういう状況では青年は雛の言葉を信じるしかなかった。
そうこうしている内にミスティアが「時間だよ♪」と周囲に響く声で知らせる。
その声で四人の表情が固まる。

アリスは険しく。
魔理沙は楽しそうに。
雛は緊張した面持ちで。
青年は敵意に満ちた表情で。

「開始！！！」
チルノが合図すると同時に、アリスは周囲に人形を出現させ弾幕を放つ。人形を使った攻撃。それがアリスの通常攻撃だ。
「右の隙間に行け！」
青年の指示で雛は動く。
「もう一度右の隙間だ！」
青年の指示通り動く雛。
だがかいくぐった隙間から新たな弾幕が放たれる。
「左だ！」
指示通り左によける雛。
その中で青年は「これならいける」と言う核心を持った。
一方魔理沙は「かわされてるぜ」とアリスに言うと「黙って作戦通り動いて！」とアリスに一喝される。
魔理沙は作戦通り通常攻撃がかわされた場合、正面から接近する。
「こちらに来ますわ！」
指示を仰ぐ雛だが青年は沈黙したままだ。
その間にアリスはスペルカードを宣言する。
「紅符・紅毛の和蘭人形！」
アリスの周囲に数体の人形が出現し、雛と青年を取り巻く。
人形を中心に花びらをイメージするかのように、七つの方向に向かって弾幕が放たれる。複数の人形から放たれる弾幕は敵を追い詰めるように入り混じり、敵の行動範囲を制限する。
「後方へバックしろ！」
雛は指示を受けて即座に後方に引く。

すると隙間の無いかに見えた弾幕は拡散することで大きな隙間を作っていた。
「右の隙間だ！」
雛は飛ぶ。
「次は左！」
飛ぶ。
「もう一度左！」
そうして飛び続け雛と青年はアリスのスペルカードを回避する。
その光景を魔理沙とアリスは驚愕していた。
「かわしちゃったぜ」
「くっ！蒼符・博愛の仏蘭西人形！」
続いて宣言されたそのスペルカードによって六体の人形がアリスの周囲に出現する。それぞれ扇状に弾幕を広げ一旦アリスに向かって放たれた後に、反転して広がりながら青年を攻撃する。
「後方へ！」
短い指示で雛は青年の目論見を悟る。
弾幕は術者を中心に広がる。広がるということは隙間が出来るということだ。つまり敵から距離をとれば弾幕の隙間が出来、かわし易いと言う事だ。
続けて放たれたスペルカードがかわされる光景を見てアリスは確信する。
「あの人、私のスペルカードを一回見ただけで見切ったようね」
「さっきのミスティアとの戦いでか？それは凄いな」
魔理沙は感心する。
モノにもよるがスペルカードはすぐに見切れるものではない。霊夢や魔理沙は経験豊富なため、初見で見切れることもできるが青年はスペルカードの初心者だ。
感心する魔理沙と対照的にアリスの表情から余裕が消える。
取り出したスペルカードを見て魔理沙は驚く。
（本気だなアリス。相変わらず人形の事となると見境無いな）

内心でそう独白した。

5―2　『タッグスペルカード戦・後編』

アリスのスペルカードをかわし切った時に、雛は青年に話しかけていた。
「良くかわせましたね」
「一つ目のスペルカードは複数の人形から放たれる弾幕だが、すべての人形が同じタイミングで弾幕を放つわけではない。だから必然的に弾幕の間に隙間が出来る」
「…」
「二つ目のスペルカードは弾幕の方向を転換して相手をかく乱させるのが目的だろうが、発射する瞬間から弾幕を見るのではなく、真正面に来た時に弾幕を見て避ければかく乱はされない」
「なかなかの洞察力ですね」
雛のほめ言葉をよそに、青年は表情を更に険しくする。
「だが俺が見たのはここまでだ。どうやら本気になったようだ。これ以上はどんな弾幕が飛んでくるのか俺にも想像できない。相手の真上に上昇しろ」
雛は青年の指示通り、アリスと魔理沙の真上に上昇する。
「アリス！相手は真上に行ったぜ」
「関係ないわ。これで終わりよ！呪詛・魔彩光の…」
アリスがスペルカードを宣言する瞬間、その真上に青年はいた。
雛は青年を抱きかかえるようにして、青年の補助をしている。
突然青年は雛の腕を握る。
「え？」
いきなりのことに雛は動揺する。
だが次の瞬間、雛はその動揺を後悔することとなった。
青年は力ずくで雛の両手を広げ
「なっ！！」
雛の懐から離れてそのままアリスに向かって飛び降りた。

ここは地上から数十メートルの上の上空だ。
青年はそこからアリスに向かってダイブし、全身全霊で厄を放った。
「！！！」
スペルカードを宣言しようとしていたアリスは咄嗟にそれを止め、人形を繰り出して青年の厄を防御する。
魔理沙とアリスの乗っている箒を覆うように出された数体の人形が厄を防ぐ壁となる。
「ぐううう！」
厄の攻撃を止められつつも青年は厄を放出しつつけ、次の瞬間
「私の人形が！」
「ちっ！」
攻撃を防がれた青年は舌打ちして重力の法則に従い落下していく。
「「「危ない！！」」」
成り行きを見守っていたチルノとミスティア、そして一瞬の動揺を後悔した雛が青年を助けに行く。
地面に激突する少し前に三人が青年を抱きとめる。
「私の…人形、が」
一方アリスは防御に使った人形が粉々に砕かれたことにショックを受けていた。
「アリス…」
アリスが人形を心底大切にしているのを知っている魔理沙は、アリスに冷静さを取り戻させようと声を掛けようとしたがすでに遅かった。
「許さない！！」
アリスは箒から飛び降り自身の力で飛翔する。
標的は、空中で何とか受け止めたミスティア・チルノ・雛に抱きかかえられている青年だ。
「戦符・リトルレギオン！」
剣を持った人形が数体出現し、アリスの周囲を回転しながら鋭い

突き攻撃を仕掛けてくる。接近戦用のスペルカードだ。
剣の先端は鋭く尖っており、まともに刺されば致命傷だ。
「駄目です！」
雛は厄を放ち、アリスのスペルカードの軌道を逸らせる。
「ひい！」
人形の剣がチルノ髪の毛にかする。
「邪魔しないで！」
アリスの瞳に憎しみが満ちる。
「この勝負はあなたの勝ちです！」
「勝負なんて関係ないわ！」
アリスに反論しようとした雛だが
「その通りだ」
青年の一言でアリスと雛は青年を見る。
青年の手に握られていた一体の人形。それは先ほどの剣を持ったアリスの人形だった。
それをアリスに向け、人形はアリスを攻撃する。
「なっ！」
アリスは咄嗟に後方へ引いてその攻撃を回避する。
「アリス！」
そこへ魔理沙がやってくる。
「ちっ」
舌打ちする青年に雛は怒鳴る。
「何をしているんですか！」
「反撃をしただけだ」
「そう言うことを聞いているのではありません！」
にらみ合うアリスと青年。
沈黙する一同。
その中で青年は再び雛の腕を振りほどき飛び降りる。
ドサ、と言う音を立てて青年は地面に降り立つ。
「俺が憎いならまた襲ってくればいい」

そう言って青年は森の中に消えて行った。
「ハッ！ま、待ちなさい！」
その後を雛が追いかける。
「アリス…」
拳を固め森を見るアリスに声をかける魔理沙だが、アリスには返事は無かった。

5－3　『止まらない感情』

人形は厄の影響を受けやすい。また人間の負の感情を取り込む事も有り、そうなった場合人形は呪い人形と化してしまう。
厄使いの青年の話を魔理沙から聞いたとき、アリスはそのことを懸念した。
それゆえ彼女は厄使いの青年を快く思っていなかった。
案の定さきほど青年はアリスの人形を使いアリス自身を攻撃してきた。
それはアリスにとって想定内の最悪事態だ。
一方の魔理沙は厄使いの青年に興味律々だ…その事実もアリスに焼きもちを焼かせていたわけだが…アリスの説得（というよりも説教）で魔理沙とアリスは青年を元の世界に戻すことにした。
それが可能なのかどうか分からないが、アリスにとって厄使いの青年はそれほどまでして避けるべき相手だった。
そうしてアリスの提案で青年を拘束することにした。
もっとも魔理沙は本当に厄介払いをしたいわけではなく、単純に青年と魔術の会話をしたかっただけだった。しかし厄を振り撒く青年に接するのに一人では不安なため、万が一厄に取りつかれた時に備えてアリスに協力を頼んだのだ。
それがこんな結果になるとは思っても見なかった。
「…」
沈黙したまま机に向かっているアリスに魔理沙は声をかけれなかった。
アリスは「新たなスペルカード」を作っている。
厄使いの青年を倒すような、いや恐らく殺すようなものだろう。
青年はアリスの逆鱗に触れたのだ。こうなったアリスにもう言葉は通用しないことを魔理沙は知っていた。
だからこの場はあえて冷却期間をおくべきだと判断してその場か

ら静かに去って行った。
「やれやれ私としたことがちょっとやりすぎちゃったな。仕方ないあまり気乗りしないが霊夢に協力を仰いで見るか」
そう言って箒に乗って博麗神社に行く魔理沙とは対照的にアリスは家に篭りスペルカードを作っていた。
※
雛は空中で青年に手を握られたとき、一瞬だけ動揺した。
人肌の温もり。ゴツゴツした男の手。
だがその一瞬の動揺を後で後悔した。
（あの動揺がなければ、彼が暴走するのを未然に防いで怒り狂うアリスさんをなだめれていたかもしれない）
雛は後悔の念に囚われながら青年の後をついて歩いている。ここは妖怪の森の中。青年はどこへ行くのかただ黙々と雛の前を歩いている。
（アリスさんは追ってきてはいない。なんだか不気味だけど今はそれに感謝しましょう。問題は）
雛は前方を歩く青年を見る。
アリスの敵意に反応して憎しみを募らせて行く青年。
「憎しみは自他共々傷つけます」
恐らくそんなことを言っても聞かないだろう。
（どうすれば良いのでしょう）
雛が迷っていると唐突に青年の歩みが止まり雛のほうを向く。
「いつまでついてくる気だ？」
「あなたが人を傷つけなくなるまでです」
言っても無駄だと分かっていたが言わずにはいれなかった。
「言ったはずだ、他者が俺の不幸を望む。だから俺も他者の不幸を願う、と」
「それであなたが傷ついてでもですか？」
「そうだ。俺はいつか傷ついて死ぬだろう。ならば一人でも多く道連れを作るだけだ」

「そんな！自分自身で墓穴を掘っているだけじゃないですか！」
「墓穴を掘れといってきたのはお前たちだ」
「っつつ！」
雛は絶句する。自己破壊・自滅型。そんな単語が思い浮かぶ。
「あなたを、大切に思う人が…悲しみます」
絶句した声を振り絞って出た雛の言葉。
それを聞いた青年は呆気に取られた顔をした後で大笑いする。
「…」
そして沈黙する雛に向かって冷たく言い放った。
「俺を心配する奴なんてどこにもいねえよ。親、家族、クラスメイト。全員が俺のことを疎ましがっている」
「！！」
青年の冷たい視線。
雛は再び絶句した。
「もう俺について来るな」
「っ！！」
そうして青年は雛に背を向けた。
雛は少しずつ遠ざかって行く青年の背中を見つめたまま立ち尽くしていた。
雛は青年の言葉に絶句したのではない。
確かに青年の言葉はとても冷たいものだった。だがそれ以上にその言葉を聴いたとき雛の頭の中に浮かび上がった言葉があった。

「あなたがいなくなると、私が悲しみます」

雛はその言葉を呑み込んだ。
それと同時に自覚してしまったのだ。己が青年に好意を抱いていることを。そしてそれをはっきりと口に出来なかったことに気づいた。
「…」

それでも雛は足を止めず青年について行った。

6－1　『黒白の誘い』

霧雨魔理沙は森の中を箒に乗って飛んでいた。
アリスの家から出てしばらく経ち、魔理沙は一人で青年に会おうとした。
アリスに気の毒な思いをさせてしまったことは後悔している。だからこそ自分ひとりで青年のことを調べようと考えたのだ。
霊夢に相談をしようと思ったが、これは自分ひとりでやるべき、と思い立ち方針を転換。
魔理沙は一人森の中で青年を探していた。
「とは言うものの何の手がかりもないんだよな」
空中をゆっくりと飛びながら魔理沙は周囲を見渡す。
青年とアリスが戦ったところから魔理沙は探索していた。
「相手は空を飛ぶことが出来ない。人の足ではそう遠くにはいけないはずだ」
そこまで推理したのは良かったがそれ以後は手詰まりだ。
考えてた末に魔理沙は
「よし、この箒に託そう！」
そう言って地面に降り、箒を地面にたて手を離す。
すると箒は当然地面に倒れる。その倒れた箒の柄の方向を見て、
「こっちだな」
霧雨魔理沙はそうして自分の進路を決めた。
※
鍵山雛は自分の前を歩く青年の背中を見ながら歩いていた。
あれから青年は雛に話しかけてこず、雛もまた青年に話しかけてない。
雛は何を話していいのか分からなかったのだ。
いつも話しかけてくるのはにとりや周囲のものたちからだった。
雛自身は厄神として自分から積極的に話しかけることはなかった。

それがコミュニケーション能力の低さ、ひいてはトークパワーの低下を招いたのだ。
そんな自分に雛は心中で悪態をつく。
（どうすれば彼の心から憎しみを消すことが出来るのでしょう。まずは会話をしないといけないのだけれど。何から話せば良いのか、自分の口下手さが憎たらしいですわ）
魔理沙やにとりのように気軽に話しかければいいのだが、それは雛のトークパワーでは不可能に近い。
ふと青年の歩む足が止まる。
「？」
雛も足を止める。
無言で森の木々を見る青年。雛もその視線の先を追った。
木々の隙間からやがて現れた人物は
「あれは、魔理沙？」
箒に乗った魔女・霧雨魔理沙が雛と青年のほうに向かってきている。それも木々の密集する森の中で相当のスピードを出して、だ。
「あれは！」
雛はその理由を悟る。
「くそ！」
青年はそう言って一目散に逃げ出す。
魔理沙の背後には無数の蜂の集団があった。
魔理沙が箒にのって飛んでいると、あやまって蜂の巣にぶつかってしまったのだ。
「魔理沙さん」
「雛！どいてくれ！」
魔理沙は絶妙な箒捌きで雛に衝突するにを回避する。
それに対して雛は蜂のほうに向かって厄を放つ。
すると蜂は先ほどまでの怒りが嘘のように反対の方向を向いて逃げて行った。
昆虫や動物は人間以上に危機感が強い。

「厄」と言う「危機」は蜂を怯えさすのに十分だった。
蜂を追い払った雛は魔理沙が飛んで行った方向へ走って行った。
※
しばらくして霧雨魔理沙は蜂が追ってきてないことに気づき、箒を止めた。
「追ってきてない、みたいだな」
「ああ」
魔理沙の言葉に答えたのは厄使いの青年だ。
「ふう、危なかったぜ」
「…」
魔理沙に警戒の視線を向ける青年。
そこで魔理沙は始めて運よく青年に会えた事に気づく。
「さて危険も去ったところでまずは自己紹介からだな。私が霧雨魔理沙だ」
「知っている。俺と交信していたやつだろう」
「そうだ」
「正直、外見はもっと年をくった婆さんかと思っていた」
「そうかそうか、だったらこんな美少女でラッキーだったな」
そう言って親指を立てる魔理沙。
そんな魔理沙を見て青年は「妙に男らしいな」と思う。
自分に敵意を向けてきたアリス。それとは真逆の対応をしてくる魔理沙。
「立ち話もなんだし私の家に来ないか？」
「何だと？」
魔理沙の意図が掴めないと言った雰囲気で青年は問いかける。
「何が目的だ」
「あんたとは話がしたかったんだよ。あんただいぶ魔術の造詣が深いみたいじゃないか」
そう言って青年に好意的な視線を向けてくる魔理沙。
青年が返事に困っていると別のところから返答が帰ってきた。

「私も一緒に行きます！！」
頭に葉っぱをのせた雛が木々の間から出てきた。
こうして青年は魔理沙の家にお邪魔することになった。

6－2　『大いなる呪法』

霧雨魔理沙の家を一言で言うと
「散らかっているな」
青年は遠慮なくそう呟く。
「美少女を名乗る前に掃除くらいしたらどうだ？」
青年がそう言うと悪びれも無く魔理沙は手を振りながら
「男なら細かいことは気にするな。適当なところにでも座っててくれ」
そう言うと魔理沙は台所へと消えて行った。
「お茶葉あったかな？」
そんな魔理沙の独白を聞きながら青年も雛も座る隙間を見つけて座った。
部屋には多くの本がある。
あるものは積み上げられ、あるものは開かれたまま置かれている。
青年が本を手にとってみる。
「英語か。こっちは読めないな」
どうやら魔理沙の持っている本は幻想郷の本と外の世界の本があるようだ。
青年も魔術師の端くれだ。興味が無いわけではない。
そのまま本を読むのに没頭していたことに気づかず…
「その本が気に入ったなら貸すぜ」
「！！」
青年が顔を上げると雛と魔理沙はお茶を飲んでいた。視線を下げると自分の前に置かれたお茶が少し冷めているのが分かった。
「こう見えてもごく普通の魔法使いだからな。魔術のことに関しては色々と詳しいぜ。その本はあまり参考にならなかったがな」
青年は本を閉じて自分の隣に置く。
「俺はここに魔術の勉強をしにきたわけではない」

「じゃあ何をしにしきたんだ？」
単刀直入に聞いてい来る魔理沙に青年は
「この幻想郷に大いなる呪法があると聞いた」
自分の目的を喋っていた。
「大いなる呪法？そんなの聞いたこと無いぜ」
雛と一緒に首を傾げる魔理沙。
「俺も文献に載っているのを見ただけだ。本当にあるかもしれないし、無いかもしれない」
軽い口調でそう言う青年に雛が質問する。
「仮にそう言うものがあったとして、それを手に入れてどうするのですか？」
雛の問いに青年は短く答える。
「世界を呪う」
短くそういった青年の言葉。知らぬものが聞いたのならば子供の戯言のように無視するか笑うかのどちらかだろう。
しかし青年を、少なくとも幻想入りしてからの青年を見ていた雛と魔理沙には青年の目的を笑い飛ばすことは出来なかった。
「それで自分で自分の首を絞めるのか？そんなことに才能を使うなんて勿体無いぜ」
「才能？」
青年は魔理沙の言葉に反応した。
「才能じゃないか。自力で幻想入りするなんて凄いことなんだぜ。私もぜひ幻想入りしたいものだ」
そういって腕を組んで頷く魔理沙。
もっとも外の世界に行くことを幻想入りと呼ばないのだが、青年の疑問は別のところにあった。
「才能なんて大げさなものじゃないさ」
「謙遜する必要はないぜ。たとえ偶然でも幻想入りを果たしたあんたは凄い。尊敬するぜ」
まっすぐな瞳で青年を見る魔理沙。

青年はなぜか魔理沙の目をまともに見れず、お茶をすすった。

6―3　『スペルカード』

青年は魔理沙の家で一晩を明かした。
魔理沙と雛は別室で、青年は本の積みあがった居間で寝た。
窓からもれる光で青年は目を覚ます。
「朝か」
周囲を見渡し自分の置かれた状況を思い出す。
どうやら熟睡していたようだ。青年は幻想郷に来てから落ち着いて寝る暇も無かった。睡眠と言うよりも仮眠といった方がいいだろう。
それなのにこの散らかっている小汚い部屋では落ち着いて眠れたことに少し戸惑う。
「魔理沙さん野菜はもっと細かく切ってください」
「これくらいが普通だぜ」
聞きなれた声のほうを見る青年。台所に魔理沙と雛が立っていた。
魔理沙は包丁を握り料理をしており、少し離れたところから雛が立っている。
青年は時計を探すが、そういったものが幻想郷には無いことを思い出す。
時計がないというよりも「時間」という感覚がないのだろう。
ゆっくりと起き上がる青年に雛が気づく。
「おはようございます。ぐっすり眠れましたか？」
「ああ、何をしているんだ」
「見て分からないか、鍋を作っているんだぜ」
「鍋？」
「朝ごはんさ」
そう言って親指を立てる魔理沙に雛は「もうお昼ですけどね」と突っ込む。
それから魔理沙の豪快な料理に文句を言いながら雛は食器を用意

する。
青年も手伝おうとしたが
「客は黙って座っておくものだぜ」
そう言って手伝うことを断られた。
一方の雛は本を適当に整理して三人で食べられるスペースを作って、そこにテーブルを置き食器を並べている。
雛が料理を手伝わないのはなぜか、と青年は思案してふと思い出す。
厄神と言う神のことを。
人々の厄を集めて回る厄神。それに近づくものは厄が取り付き病気になったり下手をすれば死に至る。
雛はそれを警戒して魔理沙に一定以上は近づかないでいるのだ。
厄を集めて回る。呪術師である青年にはその苦労が身に染みて分かる。
相手を呪い殺すことの出来る呪術は青年にとって大きな力だ、だが一歩間違えば己を傷つけるかもしれない凶器となる。
そんなものを自分から進んで集め、しかもそれが自分のために利用するのではなく他者を救うためと言う。
青年には理解不能だ。
そんなことを考えているうちに食卓に鍋が置かれた。
※
出された料理を青年は黙々と食べていた。その隣で雛と魔理沙が会話の花を咲かせていた。
「四人でのスペルカード戦ってのも面白かったな」
「暢気な人ですね。ですが最後に私の手を離して飛び降りたのは感心しませんよ」
そう言って青年のほうをにらむ雛。
青年は素知らぬ顔で黙々と食べ続けた。
そんな会話で更に花が咲いたのは魔理沙の一言が発端となった。
「しかしやっぱりスペルカード戦は一対一が醍醐味だよな。あん

たもスペルカード作ればいいんじゃないか」
その一言に青年は箸を止める。
「そんなことが出来るのか？」
「出来るぜ」
魔理沙はそう言って一枚の白紙のスペルカードを取り出す。
「これに自分の思い描いた弾幕を、具体的にイメージ、して思念を送るんだ。それで完成だ」
「それだけか？」
あまりに簡単なことに青年は疑問符を浮かべるがそれを雛が回答する。
「もちろん簡単ではありません。まず弾幕を具体的にイメージすることが難しいのです。一つ一つの弾幕をどういう風に動かすか？全体像はどう見えるのか？そういったことが具体的にイメージできなければ失敗します。
失敗すれば白紙のスペルカードは炭となって消えてしまいスペルカードは作れなくなります。それから思念を送るには魔力かそれに類するものが必要となってきます」
「けれど呪術師なら魔力を多少なりとも持っているはずだ。そこは問題ないはずだぜ」
青年は一通りの説明を聞いて自分がスペルカードを作れるかもしれないことを確信し、それを積極的に進めて行くことにした。

6－4　『白紙の…』

青年は魔理沙の家を出て行った。
時は日が昇る早朝。昨日魔理沙からスペルカードの作り方を教えてもらった。
「あとはどんなスペルカードを作るか。それが問題だ」
そんなことを考えながら青年は一人、魔理沙の家を後にした。
一方、家の中では魔理沙と雛がその光景を見ていた。
「あいつ、行っちゃったな」
「ええ」
寂しそうに呟く雛に魔理沙は問いかける。
「追わなくて良いのか」
魔理沙は雛が青年に好意を寄せている事を察していた。
「恋も魔法も一撃必殺だぜ」
そう言ってミニ八卦炉を掲げる魔理沙。
「あなたは相変わらずですね」
寂しそうに微笑む雛。
「彼の心は憎しみに満ちています。恐らく今の私が何を言っても無駄でしょう」
「そう言われれば否定は出来ないがな」
魔理沙も青年の心の闇を思い返す。
「大いなる呪法を探しているって言ってたが、どうしても見つけたいって感じじゃなかったな。もしかして幻想郷に来る事自体が目的だった、とかかな？」
雛は魔理沙のその言葉に引っかかったが、今は青年の心の闇を取り除く方法を思案するだけで精一杯だった。
「どちらにしてもしばらく彼を見守っていたいと思います」
そう言って雛も青年に遅れて魔理沙の家を出ていった。
※

青年はアテもなく一人歩いていた。体調は良好だ。魔理沙の家で休んで体力が回復したからか、原因は不明だが呪術による反動は無くなっていた。
その原因を推測しながら歩いていると
「湖か」
広い水面の広がる湖に出た。
「あ！！」
湖に近づくと聞きなれた声の人物が青年の元に跳んできた。
「お兄（にい）！」
奇妙な呼び名を使って近づいてきたのは氷の妖精チルノだった。
「この前の妖精」
「あれから森に消えちゃったからどこへ行ってたのか心配だったんだよ」
そう言って心底心配そうな表情で近寄ってくるチルノに、青年はつい申し訳なく思い
「そうか、心配かけて済まないな」
とガラにも無く謝ってしまった。
「いや、それよりも…」
青年は気にかかることをチルノに聞こうとする、
「どうしたの？お兄？」
「その呼び名は何だ？」
「何って、お兄はアタイの兄貴だからさ！」
そう言って満面の笑みを向けてくるチルノ。
「あのアリスとスペルカード戦で引き分けるなんて凄い！霊夢と同様にアリスにも恨みのある妖怪がこの森にはいるからね。そいつらはもうお兄のファンだよ」
どうやらアリスとの戦いが想像以上に周囲に波紋を広げているようだ。
「とりあえず、その呼び名を」
止めて欲しい。そういおうとした青年だがチルノはまくし立てる。

「あ、アタイのことはチルノって呼び捨てで呼んでくれていいよ！アタイがお兄の一番子分だからね」
「…」
青年はチルノの様子を見て説得することを諦めた。
※
森の中をチルノと青年は歩いている。
先頭を歩く青年にチルノが飛びながらついてくる。
「なるほど、それで白紙のスペルカードなんて持っていたんだ」
「ああ」
青年の手には魔理沙からもらった白紙のスペルカードがあった。
「餞別だぜ！」
そう言って魔理沙からもらったのだが…
（餞別ってこういう場合に使う言葉だったか？）
そんなことを考えながら青年は白紙のスペルカードを三枚もらった。
それを見ながらどういうスペルカードを作るのか思案していた。
「チルノはスペルカードを作るとき何を考えた？」
「ん？何も考えなかったよ」
「…」
「でも氷が綺麗に舞い散るように想像したら満足の行くスペルカードが出来たよ」
「そうか」
単純なチルノの返答だが、以外に的を得ているのかもしれない。
ようするに自分がイメージしやすいものにしろ、と言うことだろう。
そう解釈して青年は白紙のスペルカードを懐にしまった。
「お兄」
「なんだ」
「さっきから後を付けて来てるあれって」
「放っておけ」

そう言って青年は背後も見ず歩く。
少し離れた場所から雛が後を付けていた。

7―1　『歓喜の鼓動』

青年は自分のスペルカードをどんなものにするのかを考えていた。
チルノの情報では幻想郷の住人はそれぞれ、自分の得意とする事をスペルカードにしている。

霊夢は神社の巫女であるため「符」を使ったスペルカード。
魔理沙は魔法使いなので「魔法」を使ったスペルカード。
人形使いのアリスは「人形」を使ったスペルカード。
氷の妖精であるチルノは「氷」を使ったスペルカード。

そこで青年は思った。
「俺が得意とするものは、何だ？」

それは口に出すまでもない答え。
呪術。
しかし

「違う、それじゃあ駄目だ。呪術は俺を幸せにしてくれなかった。俺の幸せは」
そう思って傍らにいるチルノを見る。

「そう、俺のスペルカードは、それ、に決まっている」
「？」
不思議そうに青年を見上げるチルノ。
そんなチルノに青年は話しかける。
「チルノ」
「？！」
チルノはびっくりする。

チルノが青年に付いてきてから、青年がチルノの名前を呼んだのはこれが始めてだからだ。
「頼みがあるんだが」
それはチルノにとっては幸福そのものだった。
アリスを退けた青年はチルノにとって憧れの存在だ。
またその憧れの存在が自分の懲らしめる霊夢と対立していることも、チルノにとっては尊敬の念を高める要因にもなっていた。
青年が霊夢に勝つこと、もっと具体的に言えば「青年の役に立つこと」それがチルノの幸せだ。
それゆえにチルノは青年の頼み喜んで引き受けた。
「アタイお兄のためなら何でもするよ！！」
「そうか」
青年はそう言って白紙のスペルカードを出す。
「お前が記念すべき、俺のスペルカードの最初の体験者だ」
そう言って青年はスペルカードにイメージを送り、呟く。

「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」

見たことのない弾幕がチルノを覆った。

7―2　『蠢く歓喜』

チルノが青年のスペルカードを受ける光景を雛は黙ってみていた。
それがどのようなスペルカードであるのか雛には理解できた。
普段なら割ってでも止めるところに、雛の脳裏にある考えが浮かぶ。
見守っていただけの雛がゆっくりと青年の前に立ちはだかった。

※

ミスティア・ローレライは空を飛んでいた。
時は陽が沈みきった夜。中でも特に闇が濃くなる刻。
通常ならば焼き八目鰻屋台を出している時だが、最近のミスティアは屋台を出していない。
それは
「ミスティア」
「あ、リグル。見つかったかい？」
「ううん」
妖蟲・リグル・ナイトバグ。
ホタルの触覚を生やした少女の名前だ。
リグルとミスティはチルノを探していた。
いつもならば探さずとも見かけるのだが、ここ最近まったく見かけないため不審に思った妖精たち総出で、チルノを探しているのだ。
が、数が多くまた探索に長けている妖精たちでも見つけることが出来ないでいた。
「一体どこにいるんだろうねチルノ」
「まさか、どこかで高温に当てられて溶けた、とか？」
「リグル！縁起でもないこと言わないの！！！」
「ご、ごめん」

誤るリグルにミスティアは必死に頭を回転させるが、チルノの行き先に思い当たる節が無い。
「とりあえずもう一度手分けして探そう」
「うん」
リグルと別れてミスティアは一人チルノを探す。
とりあえずいつもチルノがいる、泉の周辺と妖怪の森を中心に探す。
もちろん手がかりがあるわけではなく、闇雲に探しているだけだ。
しかしミスティアはじっとしていられない。
それは他の妖精も同じだ。
チルノを見つけたいという思いが強かったのか？それともミスティアが不運だったのか？
ミスティアは一人の青年の姿を視認した。
ミスティアは少し考えて青年のことを思い出す。
以前ミスティアの店にチルノが連れてきた人間だ。
「ちょっとあんた」
ミスティアは藁にすがる思いで青年に声をかけた。
「あんたは」
青年はミスティアの顔を覚えていた。
「あんた、チルノを知らないかい？」
「チルノ？」
「ここ最近姿を見かけなくて」
青年は思案顔になる。
やがて
「チルノに会いたいか？」
「知っているのか！」
「ああ、ただし教えるには条件がある」
「なんだい？」
青年はスペルカードを取り出す。
それでミスティアをすべてを察した。

「私が勝てばチルノの居場所を教えてくれるんだね」
「ああ」
そうしてミスティアは青年と距離をとる。
妖怪の森の中で怪しい風が吹いた。

※

森の中で青年は地面に立ってミスティアを見ている。
一方のミスティアも地面から数センチ浮いているだけだ。
「先攻はもらうよ！夜盲・夜雀の歌！」
視界が一気に狭くなり大量の弾幕が青年を襲う。
それを青年はあっさりと回避する。
「そんな！」
「視界を狭くする戦法は評価できる。しかしそれに比べて弾幕に隙間がありすぎる。敵を被弾させたいならこう言う弾幕を使うべきだ」
そうして青年はスペルカードを取り出す。
「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」
そのスペルカードが発動した瞬間、ミスティアの瞳は驚愕の色に染まった。
ミスティアのスペルカードは青年にかわされたので青年の視界は元に戻っている。
その中でミスティアの視線が青年から青年の前に立っている少女に向いていった。
「チルノ！」
放心したような表情のチルノは、ミスティアの呼びかけに答えずスペルカードを取り出す。
「パーフェクトフリーズ」
青年の声でチルノはスペルカードを発動する。
ランダムに撒かれた氷の礫がミスティアに襲い掛かる。

「うわあああ！！」
ミスティアは回避する暇も無く被弾してしまう。
「ううううう」
被弾したミスティアは後方の木に頭をぶつける。
「さて、俺が勝った場合の条件を考えてなかったな」
「う、どうしてチルノが」
「お前も俺のスペルカードになってもらう」
「どういうこと？！」
ミスティアの問いかけに青年は答えず、代わりにミスティアの耳に不快な音が鳴り響き、視界が暗転する。
「ここは？」
気がつくとミスティアはステージの舞台に立っていた。
客席では色々な妖精が座っている。皆ミスティアの歌を聞きたがっているのだ。歌を歌うのが好き夜雀・ミスティアは何の疑問も感じずに歌を歌おうとした、が。
「歌が歌えない！」
声は出るのに歌おうとしたら声が出なくなる。
まるで歌うことを禁じられたかのような感覚だ。
「そんな私の歌声が！そんな！そんなあああ！！」
動揺するミスティアに冷たい声が投げかけられる。

「お前のスペルカードを頂いた」
それは青年の声だった。

7―3　『募る憎符』

ミスティアが青年のスペルカードの中に吸い込まれていく。
その光景を木々の間から一人の人物が見ていた。
「他人のスペルカードを奪い取るスペルカード。だいぶ性悪なスペルカードね」
木々の間から出てきた人物に青年は視線を向ける。
金髪の人形遣いアリスだ。
「あなたもスペルカードを作ったのね。丁度いいわ、この前の借りを返しに来たわ」
好戦的なアリスの視線を受け青年はアリスと対峙する。
「俺もだ、もっと多くのスペルカードが必要だ。あの巫女に勝つためにな」
「あら、霊夢がライバルって事。そういえばボコボコに負けてたわね」
口元に手を当てて小ばかにするように微笑むアリス。
あからさまな挑発だ。
「お前のスペルカードは役に立ちそうだ」
しかしアリスの瞳は一瞬で憎しみに染まる。
「やれるものならやってみなさい！人形を壊された私の恨みを思い知らせてあげる」
その言葉を青年は鼻で笑う。
「恨みだと？あんた程度の恨みでは俺は倒せない」
「何ですって」
「あんたのスペルカードは俺のものだ」
そう言って青年はスペルカードを発動させる。
「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」
そう言うとミスティアが出現し青年は命令を下す。
「夜盲・夜雀の歌」

相手の視界を狭め放つ弾幕。
しかしアリスはそれを簡単に回避する。
「舐められたものね。一度かわしたスペルカードが通用すると思ったの？」
そう言って視界が戻ったアリスはスペルカードを取り出す。
「あなたを倒すために作ったとっておきよ。災符・リモートサクリファイス！！」
アリスの正面に八体の人形が出現する。
リモートサクリファイス。
以前アリスが魔理沙と地底に行ったときに魔理沙の支援スペカとして使っていたものを改良したものだ。
「まずは小手調べよ」
アリスがそういった瞬間人形の一体が爆発する、と同時に一本の高速のレーザーがまっすぐに青年を襲う。
「ちっ！」
間一髪のところで青年はレーザーを回避する。
「これは初見だな。ならば」
青年もスペルカードを取り出す。
「憎符・ヘイト・ブレイカー」
地面に黒い線が縦横無尽に引かれ将棋の盤のようになる。
一方アリスは構わず攻撃を再開する。
「散りなさい」
残った七体の人形がすべて爆発し七本のレーザーが青年を襲う。
初見である青年にアリスの弾幕を回避する方法は無い。
霊夢や魔理沙のような熟練の使い手ならば初見でも見切ることが出来る。しかし青年はそこまでの使い手ではない。
ましてやこれは青年を倒す為にアリスが作ったスペルカードだ。

しかし青年はアリスのスペルカードを回避していた。

「そんな！」
「初見ならばかわせないと思っていたのか？それを補うためのスペルカードだろう？」
「まさか！」
アリスの推測は的中していた。
青年は「相手のスペルカードを見切り、回避方法を探し出すスペルカード」を作ったのだ。
「前方に出現させた八体の人形を爆発させることで高速レーザーを打つスペルカードだな。回数制限がつけられているが破壊力とスピードは抜群だ。もっともレーザーである以上その軌道は直線であるため回避しにくい、とは言えないがな」
「良く分かったわね…」
「憎しみは相手を見る度に募っていく。貴様の憎たらしい表情、髪、仕草、そのすべてを目に焼きつけ憎悪は増していく」
「…と、言いたいところだけど甘いわ」
「？！」
青年は不意に体の痺れを感じる。
「これは毒！」
「レーザーは囮よ。本当の狙いは人形の中に仕込んだ毒。もっとも致死量に至るものではないから安心しなさい。体が動けなくなる程度の毒よ」
アリスは暗い瞳で青年を見る。
「殺しちゃったらそれで終わりだしね」
そう言って青年をにらむアリス。
「なるほど、それでしっかりと風上にいたわけか」
「なっ！毒が聞いていないですって？！」
「まったく聞いてないわけではない。だが致死量に至る程度の毒を用意するべきだったな」
「くっ！」
青年の毒に対する免疫力の高さに驚きつつも、アリスは次のスペ

ルカードを取り出す。
だが青年のほうが対応が早かった。
「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」
現れたのはチルノだ。
光のない瞳のチルノに青年は命令を下す。
「雹符・ヘイルストーム」
「これはヤバいわね」
「あんたのスペルカードも俺のものだ」
「くっ！」
チルノを中心に花火が打ち上げられたように、八方に向かってまっすぐに幾つもの氷の礫が放たれる。
まっすぐに放たれた氷の礫は９０℃方向を変えてアリスに向かって襲い掛かる。
アリスの周囲は氷の礫で囲まれていた。
冷静さを欠いた状態にあったアリスはチルノのスペルカードに被弾する。
「何これ！」
「それが喜符・サクリファイス・ミスフォーチュンの効果だ」
「普通に被弾したときと感覚が違う？！」
アリスの視界が暗転し、眼前に魔理沙が現れる。
「魔理沙？どうしてここに」
「アリス」
「！」
冷たい視線。
端的にそう言い現せる魔理沙の表情にアリスは悪寒を感じた。
「私はお前が嫌いだ」
魔理沙の唐突な一言はアリスの心を大きく揺さぶった。
だが

（これは幻覚だわ！被弾した相手に幻覚を見せて相手の心を弱らせた隙に洗脳する！それがあのスペルカードの正体！！）

「私はもうお前の顔を見たくない」
そう言って背を向ける魔理沙。
「っっっつ！！」
アリスは動揺を隠せない。いくら幻覚と分かっていても、だ。
「待って！魔理…」
アリスが手を伸ばしたその瞬間ーー

「おーい、私も混ぜてくれよ！」

ーーそう言って霧雨魔理沙が二人の間に降り立った。

7－4　『厄神様の葛藤』

川がある。
川の上には奇妙な物体が浮いていた。
それは人形だった。
無数の人形が紙でできた船の乗せられ流されていく。
人形は「雛」と呼び、厄の乗せて川へと流すこの儀式を「流し雛」と呼んだ。
しかしある時期からこの流れる雛の数が減って行った。
流し雛が風習として無くなっていったからだ。
そして人は厄を払う術を捨てて生きることになる。
それは己に生まれた負の感情を蓄積させることに他ならなかった。
「どうすれば彼の憎しみを取り除いてあげるのかしら」
鍵山雛はその事だけを考えていた。
そして思い至った。
「彼の憎しみの根幹となるものを知りたい。彼がどういった経緯でそうなったのかを」
それを知る為に雛は青年と対立することを決心した。
「お前も俺の邪魔をするのか？それなら」
敵意を露にする青年に雛は毅然と言い放った。
「あなたのスペルカードになりましょう」
「！！」
雛の発したセリフは青年を沈黙させる。
「何のつもりだ？」
「私はあなたの憎しみを取り除いてあげたい」
「なぜだ？」
青年は純粋に疑問だった。なぜこの厄神が自分に拘るのかが。
「私は、厄神としての使命を果たしているだけです」
使命。

その言葉で青年は雛がそう言う存在であると言うことを思い出す。
「そうか、ならお望み通り俺のスペルカードになってもらおう。だがそんなことをしても俺の憎しみは消えない」
そう吐き捨てて青年はスペルカードを唱えた。
「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」
そうして雛はまっすぐに飛んでくる弾幕を受け止めた。
瞬間視界が暗転し、周囲の景色は雛がいる山の近くにいる人里に移った。

「…」

雛は黙って周囲を見渡す。
たくさんの村人が雛を取り巻いていた。
「厄神様がいるのにどうして厄が無くならないんだ」
「私の厄を取り除いてください！」
「無駄だ、厄を取り除けない厄神様に頼んでも無意味さ」
厄神としての使命を否定する言葉が投げかけられる。
厄神としての使命が果たせないこと。
それが雛がもっとも恐れていることだ。
しかし村人の言葉に雛は動じなかった。

「厄が消えないこと。それは確かに私の責任です。そしてこの世から厄が消えないということも私は理解しています」

厄を生み出すのは人間。その人間の厄を払おうとも、人間はまた新たな厄を持ってくる。
人間を救うこと。
厄を払うこと。
この二つは決して同時に成立しないのだ。

そうと分かっていても雛は厄を払い続ける。
一人でも多く、一時でも長く厄を払うことが雛の出来る事だからだ。
「ここであなたの憎しみを取り除けたとしても、また新たな憎しみを生むでしょう。それでも」
雛はまっすぐに前を見つめる。
「私はあなたの厄を取り除いて見せます」
そうして雛は幻覚の中に隠れた青年の記憶を見つけることに成功した。

8－1　『修練の光』

深夜、霧雨魔理沙は熟睡していた。
そこへスペルカードの衝突する音で目を覚まし、急いで着替えて箒に乗って現場に来てみれば、スペルカードを作ったらしき青年とアリスが対峙しているではないか。

「おーい、私も混ぜてくれよ」

白黒魔法使いが地面に降り立つ。
「魔理沙！」
不安げなアリスを他所に魔理沙は快活さを失わない。
「あんたスペルカード作ったんだな。早速対戦と行こうじゃないか」
アリスのスペルカードを奪い損ねた青年だが、魔理沙の方に視線を向ける。
「ああ、そうだな。あんたにはスペルカードをもらった借りがある。それを返さないとな」
「ちゃっかり返済してもらうぜ」
そう言って魔理沙はスペルカードを取り出す。
「先手必勝！」
魔理沙は五角形を形作るように五つの魔方陣を出す。
魔方陣からは星型の弾幕が反時計回りに回転しながらばら撒かれる。
移動しながらばらまかれる弾幕は回避し辛く、隙間も多くはない。
「これは」
その攻撃に違和感を覚えながらも、青年はそれをあっさりとかわしてしまう。
そして魔理沙の手に握られているスペルカードを凝視する。

「おっと、通常攻撃ではあっさりかわされてしまうか」
魔理沙は取り出したスペルカードを使わずに通常攻撃を仕掛けてきたのだ。
「スペルカードを使わないとは舐めているのか？」
「まさか、けれどスペルカード戦は遊びだからな。楽しまないと」
そう言う考えは青年はチルノから聞いていた。
スペルカードとは「戦い」の道具ではなく、悲惨な「戦い」を避けるための「勝負」として定められた、と。
ゆえにスペルカード戦では死人は出ず、けが人が続出するだけと言うことだ。
「そんな下らないルールは俺には関係ない！」
そう言って青年はスペルカードを取り出す。
「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」
そう宣言されて魔理沙の前に現れた少女を見て魔理沙は驚く。
「雛！なんで雛がスペルカードから出て来たんだ？？」
「気をつけて魔理沙！そいつのスペルカードは被弾した相手を洗脳してそのスペルカードを奪い取る能力よ！」
魔理沙の疑問にアリスが答える。
それを聞いて魔理沙は少し眉を寄せる。
「私が思っていたのとは少し違うスペルカードになってるな」
「思っていたのとは違う、とはどういうことだ？どんな光景になると思っていた？」
「そりゃあ呪術を使った、打ち上げ花火みたいな派手なスペルカードだぜ！」
そんなことをするのは魔理沙くらいだ。そうアリスが言うとしたが、青年が割り込む。
「おめでたい奴だ。お前は俺の憎しみを知らない。だからそんな暢気なことが言えるのだろうな」
憎しみを募らせた瞳で魔理沙を見る青年。
「私はお前じゃないからな。お前の憎しみは分からない。けれど

一つだけわかっていることがある。
「何だと？」
「あんたは自由が欲しいんだ。誰にも文句を言われない自由。誰にも押し付けられない自由。だけど自由ってのは手に入り辛いものだし、欲しいものがあるなら努力して手に入れないといけない」
「説教を聞くつもりはない」
魔理沙は「らしくないことをしたな」と呟きまっすぐに青年を見て言う。
「かかってきな」
それが合図あったかのように青年はスペルカードを発動させる。
「疵符・ブロークンアミュレット」
雛の周りから出た厄が円陣を組み、お守りのような形となる。お守りは厄を解き放つように壊れながら、魔理沙を攻撃する。
「よっ、ほいっと」
それを魔理沙は楽々とかわす。
「くっ！」
「私は雛とはスペルカード合戦をしているんだぜ。一度でも見ていればかわすのは容易だぜ」
「なるほど」
青年はスペルカードをしまう。
スペルカードをしまったことで雛の姿が消える。
「私は倒したいなら盗んだものじゃないオリジナルのスペルカードでかかってきな」
威風堂々とそう言う魔理沙。
一方、魔理沙のセリフを聞いてアリスは半眼で魔理沙を見る。
「オリジナル、ね」
そんなアリスの呟きはスペルカード戦に集中している魔理沙の耳には届いていない。
「見本にあんたに見せてやるよ。私のスペルカードを！」
魔理沙はスペルカードを掲げる。

構える青年。
「光符・アースライトレイ！」
魔理沙を中心に星型の弾幕が扇型にばら撒かれながら青年を襲う。
青年は二枚目のスペルカードを繰り出す。
「憎符・ヘイトブレイカー」
相手のスペルカードを見切るスペルカード。
そのお陰で青年は背後からの脅威を一早く察知し、回避する。
「背後から打ち込まれる五本のレーザーと前方から撒き散らされる星型の弾幕の挟撃か。なるほど興味深い」
「だろう。スペルカードは発想しだいで可能性は無限大さ。あんたも面白いスペルカードを使うな。けれどこれならどうかな」
そう言って魔理沙が取り出したスペルカードを見てアリスは慌てる。
「ちょ！それをこんな狭い森の中で使う気！」
アリスは慌てて二人から距離を取る為に空中へ飛ぶ。
「スペルカードを見切るスペルカードってのは面白い発想だが、これは見切れるかな」
自信満々の魔理沙を青年は冷静に分析をする。
そして魔理沙はスペルカードを発動する。

「恋符・マスタースパーク！！」

「何だと！！」
青年は絶叫した。
それは見切るとか見破るとかそういったことが出来ないスペルカード。否する必要のないスペルカードだった。
一本の極太のレーザーが青年を襲う。
ただしその攻撃範囲は限りなく広い。
（このスペルカードを回避するにはレーザーの射程外に出るしかない！）

そう思うよりも先に体が動いていた。青年は最高速で真横に回避する。
「くっ！！」
木々をなぎ倒しながら迫ってきた極太レーザーの攻撃範囲をギリギリのところで外れることが出来た。
「お、対応が早いな。じゃあもう一発行くぜ」
「何！」
ミニ八卦炉を青年のほうに向け魔理沙は二発目のマスタースパークを放った。

8－2　『顕在する怒符』

二発目のマスタースパークを放つ魔理沙。
「痛ぅ！！」
青年の右肩にマスタースパークの光線が掠る。
僅かに間合いを読み違えたようだ。
「掠っただけなのにこの威力」
痛む右肩は火傷を受けたように徐々に痛みが増していく。
（まともに受けていたらどれほどの激痛になっていたのだろうか、想像するのも恐ろしい）
そんなことを考えている間にも青年の痛みは続く。
他者を操ることを喜び、憎しみの眼で相手を見る。
そして今青年は攻撃を受けた。
痛む肩から手を離し、心に溜まったそれを開放する。
「さあ、次はそっちの番だぜ」
余裕の魔理沙。
「お前も俺の敵だ」
青年の中で怒りが膨れ上がっていき、スペルカードを取り出す。
魔理沙からもらった白紙のスペルカード。最後の一枚。
「怒符・アグリーエクスプロード！」
唱えると魔理沙と青年を囲むように無数の黒い弾が発生する。
それが何なのかは魔理沙もアリスも理解できた。
「これまで集めた厄か。けれどそれだけの量じゃ私は倒せないぜ」
魔理沙の言葉を無視して周囲の弾幕は青年に集まっていき、その間にいる魔理沙に弾幕となって襲う。
「簡単だぜ」
余裕で弾幕をかわす魔理沙。
そしてかわされた弾幕はそのまま青年に向かって行き
「ありゃ？自爆か？」

そのまま青年に被弾する。
「これは、まさか」
遠巻きに見ていたアリスがいち早くその意図を理解する。
青年に被弾した黒い弾幕は、方向を変え外側に向かって放出される。
その量は先ほどとは比べ物にならないくらい多くなっていた。
「おっと、難易度ノーマルってところかな」
そういいながらまたも余裕でかわす魔理沙。
だが弾幕は再び方向を変え青年に向かって集まる。
背後から急襲されつつも余裕でそれをかわす魔理沙にも、このスペルカードの意図が読めてきた。
青年の元に集まった黒い弾幕は再び量を増やして魔理沙に襲い掛かる。
「なるほど、拡散と吸収を繰り返して無限に弾数を上げていくスペルカードか。これはちょっとやばいかもな」
現状魔理沙の感覚ではハードの分類の弾幕量だが、次はルナティックレベルの量になるかもしれない。さらにその次には、
「どう言う弾幕になっているんだろうな。楽しみな気はするがそっちばかり攻撃するのはずるいぜ」
それを楽しみにしつつも魔理沙は反撃する。
最初と同様に五つの魔方陣から放たれる星型の弾幕。
スペルカードを詠唱し続ける青年には回避行動はとれない。
そう考えての通常攻撃だった、が。

「喜符・サクリファイス・ミスフォーチュン」

「同時に二枚のスペルカード！反則だわ！」

スペルカードの発動は一回の攻撃につき一枚。そう決められている。

複数発動されれば数が多く発動できる高位の妖怪や魔法使いなどが有利になるからだ。
低位の妖怪や人間でも高位の妖怪や魔物に勝てる。
そういった平等の思想がスペルカード戦にはある。

「雹符・ヘイルストーム」

アリスの罵声を無視して青年は攻撃を続ける。
喜符から現れたチルノはスペルカードを取り出し青年の指示通り動く。
放たれた雹は青年を守るように囲み、魔理沙の攻撃を防ぐ。

「面白いぜ！今まで同時にスペルカードを二枚以上相手にしたこと無かったな」

そんな中でも魔理沙は楽しそうに笑う。
しかしその表情には余裕はない。
すでに怒符の弾幕量はルナティックに達していた。そして弾幕は青年に向かって集まり、今再びその凶悪な牙を剥こうとしている。
「来い！」
魔理沙はかわすことに集中する。
次の瞬間。あたりを埋め尽くさんばかりの量の弾幕が魔理沙を襲った。

8－3　『憂鬱の巫女』

白と紅の衣に身を包み、博麗霊夢は神社から出ようとしていた。
目指すは不穏な気配のする方向だ。
深夜。眠っていた霊夢は不穏な気配を感じて起きた。
これまでの「異変」の前触れに似た感覚だ。
ただ今回は霊夢は気が進まなかった。
　異変がどういうものでどんなことが起きるか分からない。
ただ何となく

「あの厄使いの仕業な気がするわね」

そんな霊夢の勘は当たっていた。
こう言う時の自分の勘は当たるのだ、と。霊夢自身気がついている。
だからなおの事、霊夢は気が引けた。
「会いたくないわね」
霊夢の青年に対する認識。
それはそう言うことだった。
暗く重苦しい空気をまとった青年。
一片の光も生み出さず、闇の中に沈んで行く空腹感に似た感覚。
それは霊夢にとって気持ちの悪い感覚だった。
「復讐、ね」
神社で青年が休んでいたとき、霊夢は青年の過去を垣間見てしまった。
別に同情しているわけではない。ただ霊夢にはあのまま厄使いの青年に係わるとロクでも無いことが起こりそうな気がするのだ。
「厄って集まると、やっぱりそうなるわよね」
しかし異変を解決するのが博麗の巫女の役目だ。

重いため息をついて霊夢は戦場へと向かって行った。

8－4　『根源たる憎符』

鍵山雛は見たことのない町並みの中にいた。
八百万の神の気配が感じられない国。
「ここが外の世界。あれは」
そう呟き、雛は青年の姿を発見した。
草木の代わりに鋼鉄に彩られた道を青年は歩いていた。
次々と流れ込んでくる青年の記憶を見る内に、雛は青年の復讐の根幹にたどり着いた。

そこは青年の家だった。
テーブルとソファがあり、大人の男女が青年と対面するように座っている。
テーブルより少し離れたところには「長方形の黒い鏡」があり、その上に丸い時計が掛けられている。
外の世界といえども幻想郷に似たものはある。
テーブルや椅子、時計くらいは雛も見たことがある。
もっとも使っているのは幻想郷の人間だが。
雛が見たことの無いものは「長方形の黒い鏡」くらいだ。
それがテレビと呼ばれるものであることは雛は知らない。
しかしそれを雛が知ったところで雛の目的には何の関係も無いだろう。
雛は大人の男女と青年の会話に集中した。
「…、これはなんだ」
そう言って男から提示されたものを見つめて青年は何を言われるのか分かっている、と言う風な表情をしていた。
「入社試験は合格したのに、どうして面接で落とされたりしたんだ」

それは青年が入社試験の面接を受けた翌日の話。
「不合格」と書かれたハガキが青年の家に来た。
青年は黙したままだ。
大人の女性が口を開く。
「…はやれば出来る子なの。なのにどうしていつも肝心なときに手を抜くの」
青年を嗜める口調。
雛は大人の男女が青年の両親であることを察した。
「どうせ俺は父さんや母さんみたいに優秀じゃないよ」
「そんな投げやりな言葉が聞きたいんじゃない！」
怒鳴る父。
「あなた、落ち着いて」
慌てて諌める母。
父が怒りを沈める中、母が優しい口調で語りかける。
「もう一度会社の人に問い合わせてみましょう。何かの間違いかもしれないし」
この期に及んでそんなことを言う母に青年は呆れた口調で言う。
「そんなことをしても無駄に決まっているだろう？不合格って言う通知が来たんだから」
その一言がとどめになったかのように母は涙を流す。
「どうしてこんなことに。私の息子が浪人だなんて」
「どうしてお前だけ」
消沈する父と母。
青年の中に憎悪が膨らんでいくのを雛は感じていた。
それは昨日今日の間に積もったものではない。
もっと幼い頃から、長い時を掛けて育くまれて来た感情の塊。
それがもう少しで爆発しようとしていた。

「父さんが…に不健全なことを教えたのが原因かもしれない」
「そうね。義父さんは…に甘かったから」

それはいつも通りの結論。
この両親が青年の不出来を祖父のせいにする言葉。
それが青年の心に憎しみの雫を一滴一滴、溜めていった。
しかしその日だけはそこで終わらなかった。
そもそも青年が幼い頃に祖父との接点が多かったのは、仕事で忙しい両親に代わって青年の面倒を見ていたからだ。

青年の祖母は青年の父が学生の頃に他界し、男手一つで祖父は一人息子を育ててきた。
別段取り柄が無かった祖父は、自給の安い仕事をこなしながら一人息子を育てて行くしかなかった。
そんな貧乏生活の中で「無能だから貧乏なのだ。エリートになれば金持ちになれる」そういったエリート意識が青年の父の中に芽生えて行った。
そして必死で勉強して一流の大学を出て就職先も医者と言う立場に就くことで青年の父は自己を確立できた。
それであるが故にその価値観を自分の父親と子供にも押し付けたのだ。
青年の父は言葉を続ける。

「父さんは三流だからな。そんな人に俺の息子の面倒を見させたのが間違いだった」

（間違い？それは誰のことを言っているのだ？）
青年の中で黒い感情が膨れ上がる。
（爺ちゃんは、間違ってなんかいない。間違っているのは仕事にかまけて子育てをおろそかにした父さんの方だ！
なぜ爺ちゃんが侮辱されなければいけないんだ！）

「爺ちゃんのことを何も知らないくせに偉そうなことを言うな！」
「なっ！お前父親に向かってなんて口を！」
「貴様を父親なんて思ったことなんて一度も無い！！」

そこからはただの罵り合いだった。
お互いの欠点を貶し合い、罵声を飛ばし、悲鳴と号泣する母を振りほどいて青年は自室に篭った。
泥沼の感情が青年の中で渦巻く。
カーテンは閉められ、日の光が届かない部屋でどれくらい青年は躊躇していたのか分からない。

やがて青年は冷たく凍った瞳で「それ」を行う。

「駄目えええ！！！！」

青年のやろうとしたことに気づき、雛は声を上げる。
しかしそれはむなしく雛自身の耳に響くだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5615s/

厄神様の厄

2011年12月31日03時46分発行